

環状集落の分節構造と異系統家屋

The Segmentation Structure of Circular Villages and Extraneous Houses

谷口康浩

TANIGUCHI Yasuhiro

①序論 —着眼点と術語の定義—

②分析 —勝坂式期の異系統家屋—

③考察 —異系統共存現象を生む社会関係—

④結論

【論文要旨】

本論では、縄文時代中期の環状集落を構成する家屋の中に系統の異なる家屋型式が共存する現象に着目し、これを「異系統家屋」として概念化するとともに、かかる観点から環状集落の分節構造の成り立ちとその背後にある社会関係について考察した。関東・甲信地方で拠点的な環状集落の造営が始まる中期前葉の五領ヶ台式後半から中期中葉の勝坂式期の事例に焦点を当て、分節構造の形成過程に異系統家屋がどのように関わったのかを検討した。

その結果、中期中葉勝坂式期の関東地方南西部には、北陸系の異系統家屋と推定される二重柱穴列の掘立柱建物、中信系の異系統家屋と推定される「柱間溝」を有する大形竪穴住居や多柱穴の円形竪穴住居が移入され、一部の環状集落に受容されていたことが明らかとなった。異系統家屋の受容は同じ地域にある集落でも一様ではなく、また環状集落を構成する分節単位ごとに異なる場合があることも指摘した。また、それらの異系統家屋の伝わり方が、隣接する地域や集落を順に経由した玉突き式の単純な伝播ではなく遠隔地間の直接的関係を示唆している点を、事例集成と分布論的分析から明らかにした。

このような諸現象を根拠として、勝坂式期における拠点的な環状集落の造営に複数の系統の異なる単位集団が関与していた可能性があること、そしてそれらの単位集団が個々にアイデンティティを保持し、かつ集落外・遠隔地につながる集団関係を有していたことを論じた。また、異系統家屋の受容・共存が、同時期の土器群に見られるキメラ的な折衷土器や異系統土器の共存という現象とも密接に関連している点を指摘した。結論として、こうした諸現象を生じさせた要因を合理的に説明するモデルを提示し、勝坂式土器の分布圏に広がる広域部族の内部がリネージまたはシブのような単系出自集団に分節化していたこと、地域を超越した異系統家屋や異系統土器の動きが外婚制や半族組織によって助長された可能性が高いと考察した。

【キーワード】 環状集落、分節構造、異系統家屋、異系統土器、分節的部族社会、縄文時代中期、中期中葉、勝坂式土器、リネージ、シブ、単系出自集団、外婚制

①……………序 論 —着眼点と術語の定義—

1-1. 研究目的と着眼点

縄文時代中期の関東・中部地方では、社会の複雑化を示唆する変化がさまざまな面に現れてくる。地域全体で遺跡の数と分布密度が高まり、集落遺跡が増加する状況の中で、環状集落が著しく発達し、その最盛期といえる段階を迎えたことは、遺跡群の現象面に現れた際立った変化として特筆される。環状集落の様相は前期とは大きく異なったものとなり、一部の環状集落が長期継続的に維持され、拠点的で大規模な集落遺跡となっていくところに中期的特質がある。特定の集落に地域内の圧倒的多数の住居や墓が集中し遺構が累積していくこの現象は、地域集団による拠点形成の動きを表すものと考えられる。

この種の環状集落の拠点的性格は、集落の中央に造営された集団墓に端的に表れており、世代を超えて埋葬が続けられた結果、夥しい数の土壌墓が密集している例が特徴的に見られる。このような拠点集落の形成と集団墓の造営には、地域集団の社会的紐帯を強める意味機能があったと見てよいであろう。強固な社会組織と伝統がなければ、こうした社会的行為を長期にわたって継続することはできず、そこからは祖先の記憶や血縁的系譜を大切にす何らかの親族組織の存在が浮かび上がってくる。

また、そうした拠点形成の動きと同時に、環状集落の内部では、住居群や墓群を複数の単位に区分する「分節構造」が顕在化してくる。環状集落は単純な住居の集合体ではなく複数の分節の単位を包含し、それらを一つの環に統合する構造をもつ。環状集落の内部にこのような分節構造が顕在化してくることもまた、中期に認められる際立った特質であり、社会組織の質的な変化を強く示唆している。

中期の関東・中部地方に起こったこうした諸現象は、縄文時代の社会構造とその長期的な変化を歴史的に考察する上でも重要な意味を内包しており、変化の具体相とその社会背景を追究していく必要がある。筆者はそのような問題意識から環状集落の研究に取り組んでいるところである。とりわけ中期に顕在化した分節構造については、社会組織の複雑化を具体的に捉える重要な手がかりとして注目しており、これまでも中期環状集落の分節構造に着目した研究をおこなってきた〔谷口2002・2005・2014ほか〕。

本論では、中期の環状集落を構成する家屋の中に系統の異なる家屋型式が共存する現象に着目し、かかる観点から環状集落の分節構造の成り立ちとその背後にある社会関係について考察する。関東・甲信地方における環状集落造営の時期的なピークは中期後葉にあるが、分節構造の意味や社会的背景を探るためには、中期前葉から中葉における分節構造の形成過程を検討する必要がある。本論では、拠点的な環状集落の造営が開始される五領ヶ台式後半から勝坂式期の事例に焦点を当て、分節構造の形成過程を念頭に置きながら異系統家屋の現象面を分析する。その上で、分節構造を特徴とする中期環状集落の形成に異系統家屋がどのように関わっていたのかを論じてみたい。

1-2. 術語の定義

本論に先だち、「分節構造」と「異系統家屋」という二つのキーワードの意味を明確にしておきた

い。本論ではこれらの語句を以下のように定義された術語として用いる。いずれも筆者の造語であるため、あらかじめ基本的な認識を明示しておく。

「分節構造」とは、環状集落を構成する堅穴住居・掘立柱建物・土壙墓などを複数の単位に空間的に区分する構造を指す。環状集落に内在する家屋群や墓群のセクションと表現することもできる。堅穴住居群や土壙墓群を大きく二分する二大群の構造やさらに多くの分節的単位を内在させた事例が知られる。このような現象がとくに顕著に見られるのは中期の環状集落においてであり、とりわけ長期間にわたって多数の遺構群を累積させた拠点的な環状集落に鮮明に現れている場合が多い。前期の環状集落では分節構造は不鮮明であるが、中期になると、拠点的な環状集落の出現・増大とともに、このような構造が著しく発達した。後期の環状集落にも分節構造の明確な事例がある。筆者の見解では、環状集落の分節構造は集落の造営に関わった社会集団そのものの分節化を表す現象であり、ことに血縁的系譜や出自の区別に基づく親族集団の組織化と分節化を表示している可能性が高い。出自や祖先の観念を組織原理とする部族社会の成立が、環状集落の歴史的背景となっており、とりわけ分節構造が発達した中期には、「分節的部族社会」の段階に達していたと推定される[谷口2002・2005]。

「異系統家屋」は、環状集落を構成する同時期の建物跡の中に異質な型式・形態のものが共存する現象に注目し、その意義を際立たせるために考案した新たな術語である。異系統家屋の狭義の意味は、明らかに他地域に由来する異質な家屋—堅穴住居・掘立柱建物など—が、環状集落内に組み込まれているケースを指す。縄文土器の研究で用いられる「異系統土器」の語は、大多数を占める在地の型式の土器群に混じって少量出土する、他地域の型式ないしその流れを汲む土器を指すのが一般的な意味である。これに対して本論で用いる異系統家屋は、少数のイレギュラーの混在を意味するものではなく、遠隔地に由来する異質な家屋が環状集落内に組み込まれた状態に着目するものである。異系統家屋だけで構成された環状集落も見られる。一方、出所来歴は必ずしも明確でなく他地域からの移入とは断定できないが、異質で対照的な形態の家屋が集落内部に共存するケースが確認される。集落の東西あるいは南北に分かれて形態の異なる家屋が配置されたケースのように、分節間の家屋の異質性を意味する場合にも「異系統家屋」の語を広義に用いることとする。

時期区分については、次のように記述する。中期を前葉・中葉・後葉に3区分し、五領ヶ台式期および勝坂式直前（阿玉台I b式よりも古い土器群）までを前葉、勝坂式期を中葉、加曾利E式・曾利式期を後葉とする。中期初頭と表現する場合は、五領ヶ台式I式期を指す。勝坂式期は猪沢式・新道式期を1式期、藤内式期を2式期、井戸尻式期を3式とする一般的な編年区分に従う。ただし、表1・表2の集成表では、長野県・山梨県の事例について井戸尻編年の型式名を併用した。

②……………分 析 —勝坂式期の異系統家屋—

2-1. 二重柱穴列をもつ掘立柱建物

関東地方南西部における勝坂式期の環状集落には、二重の柱穴列をもつ長方形ないし長楕円形の掘立柱建物を伴った例が知られている。環状の居住ゾーンの内側にこの種の長大な掘立柱建物を配

置し、外周に竪穴住居がめぐる空間構成が最も特徴的である。筆者が「勝坂タイプ」と仮称する環状集落の一形態であり〔谷口2005〕、現時点で以下の8例が知られている。

東京都稲城市多摩ニュータウンNo.471 遺跡南集落〔東京都埋蔵文化財センター編1993〕

東京都八王子市神谷原遺跡〔八王子市櫛田遺跡調査会編1982〕

東京都町田市忠生遺跡B地区B1地点〔忠生遺跡調査団編2011〕

神奈川県藤沢市ナデッ原遺跡〔戸田1989・2009〕

神奈川県横浜市前高山遺跡〔横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編2001〕

神奈川県横浜市小丸・小高見遺跡〔石井2001a〕

神奈川県横浜市神隠丸山遺跡〔石井1989, 横浜市埋蔵文化財センター編1990〕

神奈川県横浜市大熊仲町遺跡〔横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編2000〕

このタイプを特徴づけている二重柱穴列の掘立柱建物は、中期の掘立柱建物の中でも際立って大規模なものを特徴的に含んでおり、その長さは10～15mを中心に最大では23mに達する例がある。佐々木藤雄〔1984〕による掘立柱建物跡の分類でⅢ-b類とされたもの、また石井寛〔1989〕による掘立柱建物の分類でD類とされた一群である。多摩ニュータウンNo.471 遺跡南集落の4号掘立柱建物跡で内部から焼土が検出された例があるが、竪穴住居に一般的に作られているような明確な炉の痕跡は確認できない場合がほとんどである。石井は2001年時点で17遺跡54棟+aの類例⁽¹⁾を挙げているが〔石井2001b〕、その後報告された事例を合わせて再検討した結果、現時点までに確認された中期前葉・中葉の類例は、上記の環状集落で検出されたものを含めて19遺跡71棟である(表1)。図1・図2に主要な事例を示す。

神奈川県前高山遺跡(前掲)では、長径約8～13mの二重柱穴列の掘立柱建物が11棟検出されており、土壌群がある中央空間の周囲に環状に配置された形となっている(図3a)。ほとんどの掘立柱建物は長軸を環の円周に沿わせる向きに配置されており、新潟県・山形県の中期環状集落に見られる長方形住居の放射状配置とは異なる。二重柱穴列タイプの掘立柱建物群が描き出す環状のゾーンは約80m×50mの規模である。長径13m前後の最も規模の大きい掘立柱建物である16Hと17Hが、集落全体を見渡す位置に重複して建築されている点が注目され、その南側に位置する18Hも道路により半分以上が破壊されているが同様の規模と見られる。これらが集落内の中核的家屋ないし施設となっていた可能性がある。ほかに勝坂式期の竪穴住居跡が12棟ないし13棟あるが、それらは掘立柱建物のゾーンよりも外側に展開している。

神奈川県藤沢市ナデッ原遺跡でも、9棟の二重柱穴列掘立柱建物を、長軸を環の円周に沿わせる向きに環状に配置した集落跡が発見されている〔図3b, 戸田2009〕。掘立柱建物は長径15mから20m以上の長大なもので、前高山遺跡を凌駕する規模⁽²⁾である。掘立柱建物群のゾーンは直径約90mの明瞭な環状をなし、その外側に23棟の竪穴住居跡が展開する空間構成となっている。前高山遺跡とナデッ原遺跡は、同一のスペースデザインの下に集落が構成されたものと考えられる。

前高山遺跡・ナデッ原遺跡のその空間構成とよく似た家屋配置をもつ環状集落が新潟県上越市和泉A遺跡で見出されている〔新潟県埋蔵文化財調査事業団編1999〕。和泉A遺跡の中期前葉の集落は、

表1 二重柱穴列をもつ掘立柱建物の事例集成

遺跡No.	事例No.	所在地	遺跡名	遺構名	外側規模(m)		内側規模(m)		柱穴数		時期	文献	
					長軸	短軸	長軸	短軸	外側	内側			
1	1	新 潟	和泉A	SB 6	5.6	3.8	2.9	1.5	9	4	中期前葉	報1	
	2			SB23	14.6	4.7	11.8	1.9	13	12	中期前葉		
	3			SB24	16.5	4.1	13.9	2.8	12	12	中期前葉		
	4			SB25	6.4	3.3	3.8	1.6	9	6	中期前葉		
	5			SB27	6.5	3.6	4.0	1.9	10	4	中期前葉		
	6			SB31	-	3.8	6.5	1.9	6	8	中期前葉		
	7			SB32	6.4	3.4	3.7	1.6	6	6	中期前葉		
	8			SB33	5.5	3.8	3.0	1.4	10	4	中期前葉		
	9			SB34	5.7	3.8	3.0	1.3	9	4	中期前葉		
	10			SB37	5.7	3.3	3.5	1.7	8	4	中期前葉		
	11			SB40	6.7	3.6	4.3	1.7	7	4	中期前葉		
	12			SB41	5.5	3.1	3.1	1.5	9	4	中期前葉		
	13			SB45	5.3	3.4	2.8	1.9	10	4	中期前葉		
2	14	長 野	一之瀬・芝ノ木	Ⅱ次10号柱列	4.2	3.8	1.6	1.5	8	6	記載なし	報2	
	15			Ⅱ次13号柱列	8.2	6.0	5.9	4.1	12	8	記載なし		
3	16	東 京	神谷原	方形柱穴列	23.0	8.0	21.0	4.9	18	15	中期中葉	報3	
4	17		忠生B地区 (根岸山)	B1-1掘立柱	8.5	5.2	5.6	3.0	12	6	中期中葉	報4	
	18			B1-2掘立柱	9.8	3.9	7.4	2.5	15	8	中期中葉		
	19			B1-3掘立柱	(8.2)	4.9	6.2	3.2	(8)	6	中期中葉		
	20			B1-4掘立柱	8.8	3.8	3.8	2.3	12	6	中期中葉		
5	21		日影山	I 群	-	5.7	-	3.2	(13)	6	記載なし	報5	
6	22		TNT No.471	1号掘立柱	-	-	9.8	3.6	-	-	-	勝坂2	報6
	23			2号掘立柱	13.0	-	8.4	3.4	(17)	11	-	新 道	
	24			3号掘立柱	13.0	5.4	10.3	3.2	12	10	-	新 道	
	25			4号掘立柱	14.0	5.2	11.0	3.1	15	10	-	新 道	
	26			5号掘立柱	-	4.3	9.1	2.5	(11)	8	-	新 道	
7	27		神奈川	宮 添	3・4号掘立柱	13.6	7.0	10.2	3.8	(18)	13	加曾利E	報7
8	28			南 原	1号掘立柱	6.9	5.0	5.2	3.2	10	6	勝 坂	報8
	29	4b号掘立柱			7.0	5.2	-	-	19	-	勝 坂		
	30	5号掘立柱			8.3	5.3	4.7	3.1	14	6	勝 坂		
	31	7号掘立柱			9.6	5.3	6.2	3.7	11	6	勝 坂		
	32	15号掘立柱			9.1	5.5	6.5	3.3	11	8	勝 坂		
9	33	ナデッ原		1号掘立柱遺構	-	-	-	-	-	-	-	記載なし	報9
	34			2号掘立柱遺構	-	-	-	-	-	-	-	記載なし	
	35			3号掘立柱遺構	-	-	-	-	-	-	-	記載なし	
	36			4号掘立柱遺構	-	-	-	-	-	-	-	記載なし	
	37			5号掘立柱遺構	-	-	-	-	-	-	-	記載なし	
	38			6号掘立柱遺構	-	-	-	-	-	-	-	記載なし	
	39			7号掘立柱遺構	-	-	-	-	-	-	-	記載なし	
	40		8号掘立柱遺構	-	-	-	-	-	-	-	記載なし		
	41		9号掘立柱遺構	-	-	-	-	-	-	-	記載なし		
10	42	高 山	1号掘立柱	15.2	6.5	9.1	3.7	11	8	中期中葉	報10		
11	43	前高山	1号掘立柱	7.7	4.6	4.8	3.3	9	6	中期中葉	報11		
	44		2号掘立柱	10.5	5.9	8.0	3.4	13	9	中期中葉			
	45		6号掘立柱	10.2	5.4	6.2	3.1	12	6	中期中葉			
	46		9号掘立柱	9.1	5.5	4.6	3.3	14	6	中期中葉			
	47		10号掘立柱	10.1	5.1	4.7	2.5	14	6	中期中葉			
	48		14号掘立柱	8.3	5.4	4.5	3.5	11	6	中期中葉			
	49		15号掘立柱	9.1	5.4	4.7	3.0	14	6	中期中葉			
	50		16号掘立柱	12.4	6.9	7.4	3.8	16	8	中期中葉			
	51		17号掘立柱	13.4	6.3	8.1	3.7	16	7	中期中葉			
	52		18号a掘立柱	12.8	6.1	-	2.7	-	-	中期中葉			
	53		18号b掘立柱	-	6.8	-	2.7	-	-	中期中葉			
	12		54	小丸・小高見	17号掘立柱	-	-	-	-	(21)		14	勝 坂
55		26号掘立柱	-		-	-	-	(13)	8	勝 坂			
13	56	三の丸	B1掘立柱	16.9	5.7	13.0	3.5	(24)	10	勝 坂	報12		
14	57	花見山	B1号掘立柱	11.7	7.3	9.5	4.5	14	8	五領ヶ台～勝坂	報13		
15	58	神隠丸山	1・2・3 c 掘立柱	-	-	-	-	-	-	-	記載なし	報14	
	59		5c掘立柱	-	-	-	-	-	-	-	記載なし		
	60		6c掘立柱	-	-	-	-	-	-	-	記載なし		
	61		14c掘立柱	-	-	-	-	-	-	-	記載なし		
	62		18c掘立柱	-	-	-	-	-	-	-	記載なし		
	63		23c掘立柱	-	-	-	-	-	-	-	記載なし		
16	64	北川貝塚	JHB 2	10.0	6.5	7.0	4.0	16	9	中期前葉	報15		
17	65	大熊仲町	2号掘立柱	11.4	5.2	9.2	3.0	18	8	勝 坂	報16		
	66		3号掘立柱	14.2	6.0	8.8	3.0	19	13	勝 坂			
	67		5号掘立柱	11.0	6.2	8.1	4.2	(10)	(6)	勝 坂			
	68		6号掘立柱	-	6.0	-	3.5	(12)	(8)	勝 坂			
	69		9号掘立柱	15.7	5.1	12.9	4.0	(16)	11	勝 坂			
18	70	新羽貝塚	1号ピット群	9.4	-	6.6	-	-	-	記載なし	報17		
19	71	大口台	1号掘立柱	-	-	-	-	-	-	勝 坂	報18		

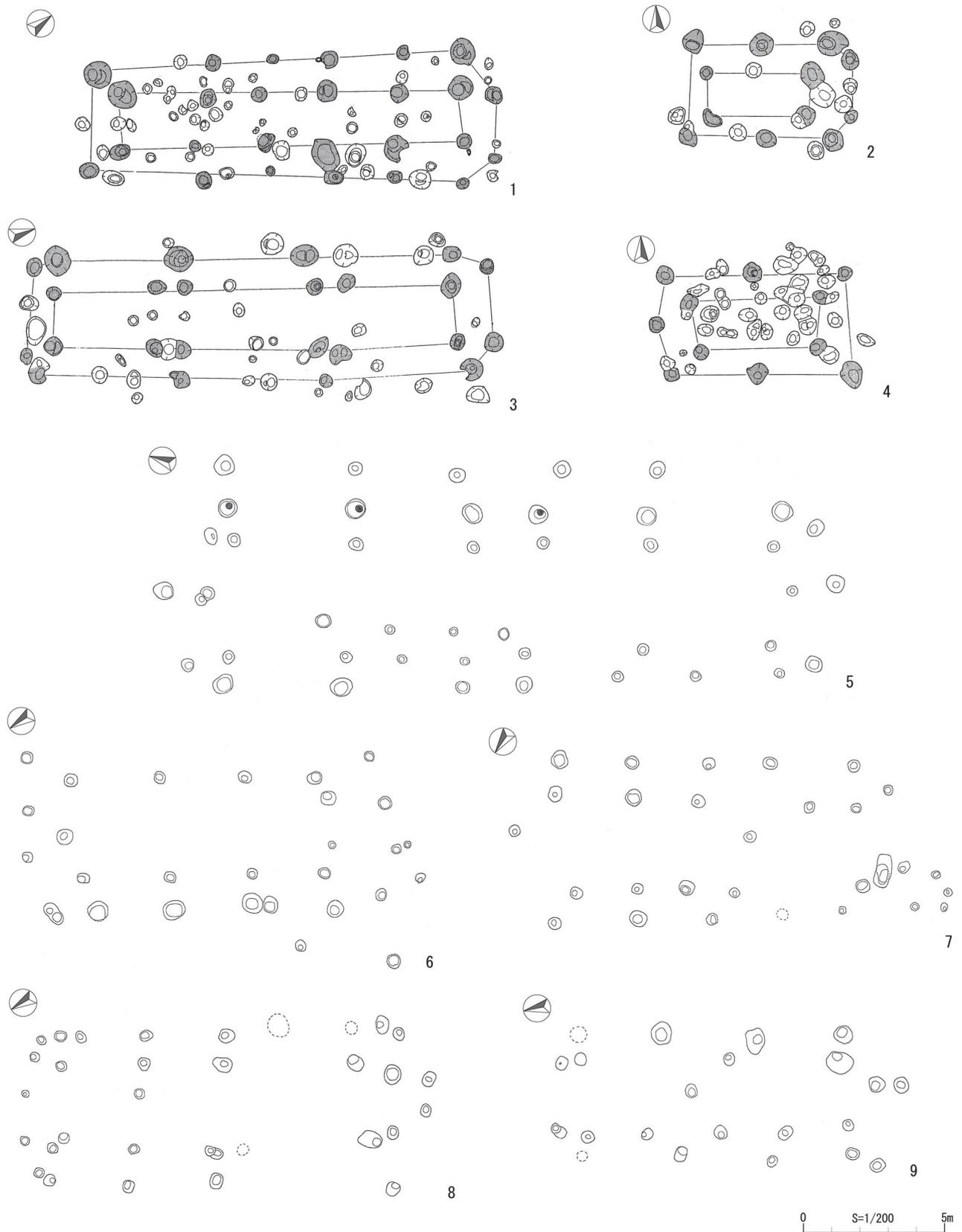


図1 二重柱穴列をもつ掘立柱建物跡(1)

1. 和泉A遺跡SB23 2. 同SB37 3. 同SB24 4. 同SB40 5. 神谷原遺跡方形柱穴列
6. 多摩ニュータウンNo.471遺跡2号掘立 7. 同3号掘立 8. 同4号掘立 9. 同5号掘立

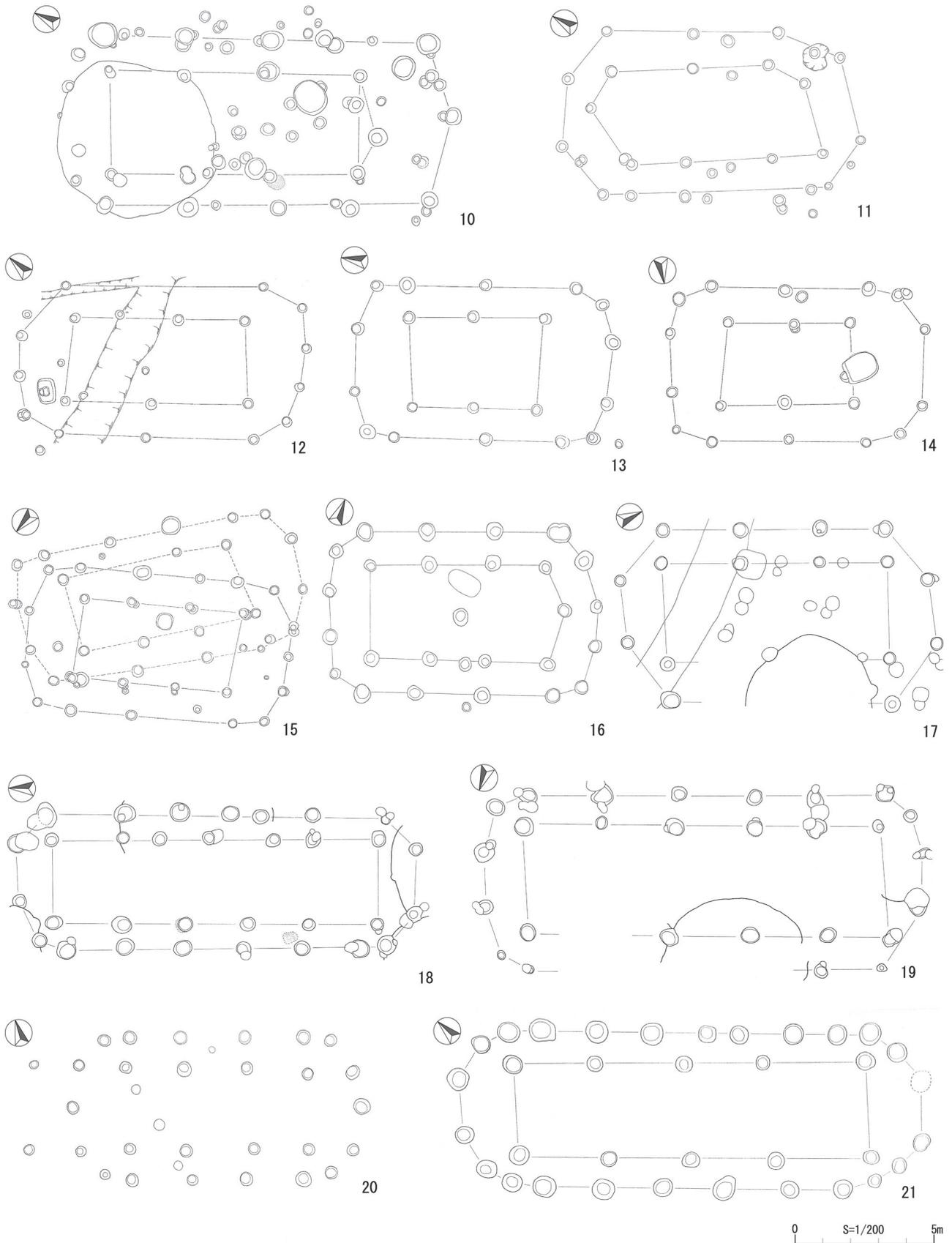


図2 二重柱穴列をもつ掘立柱建物跡(2)

10. 高山遺跡1号掘立 11. 前高山遺跡2号掘立 12. 同6号掘立 13. 同9号掘立 14. 同15号掘立 15. 同16・17号掘立
 16. 北川貝塚JHB2 17. 大熊仲町遺跡5号掘立 18. 同3号掘立 19. 同9号掘立 20. 同2号掘立 21. 三の丸遺跡B1掘立



図3 神奈川県前高山遺跡・ナデッ原遺跡・東京都忠生遺跡B地区・新潟県和泉A遺跡の集落構成

環状の居住域の内帯に沿って掘立柱建物を巡らし、外帯に竪穴住居と遺物の廃棄帯を配置した構成となっている（図3d）。掘立柱建物は確認されたものだけで41棟あり、ほかにも860以上のピットがあることから考えると実際の棟数はさらに多かった可能性もある。数の上でも規模・構造からみても、主たる家屋は内帯に配置されたこれらの掘立柱建物群である。同遺跡の報告書では規模と平面形に基づいて4大別13細分されているが、なかでも規模が大きく主要な家屋と考えられるのが二重柱穴列をもつ長方形掘立柱建物（報告書の分類のC類）であり、13棟が確認されている。遺物

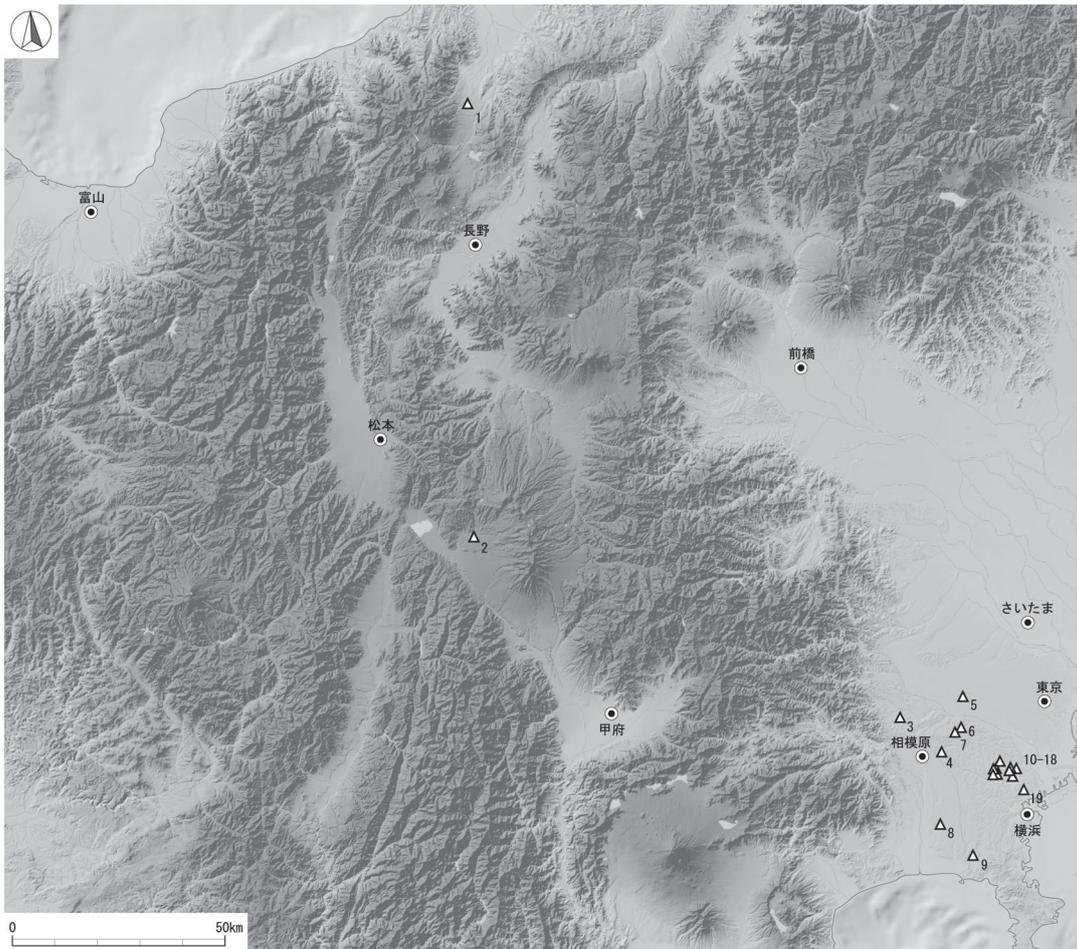


図4 二重柱穴列をもつ掘立柱建物跡の地理的分布

1. 和泉A 2. 一之瀬・芝ノ木 3. 神谷原 4. 忠生B地区 5. 日影山 6. TNT No.471 7. 宮添 8. 南原 9. ナデッ原 10. 高山
11. 前高山 12. 小丸・小高見 13. 三の丸 14. 花見山 15. 神隠丸山 16. 北川貝塚 17. 大熊仲町 18. 新羽貝塚 19. 大口台

の廃棄帯が途切れる集落東側の中央に平行して配置された、長径 16.2m の SB24 と長径約 14.4m の SB23 がとくに際立っており、これらの長大な掘立柱建物が集落内の最も中核的な家屋ないし施設となっていたものと考えられる。

前高山遺跡・ナデッ原遺跡と和泉 A 遺跡は、現代の整備された道のりでも 300km 以上を隔てた遠隔地にありながら、家屋の形態と集落の空間構成に偶然の類似とは考えにくい共通点を有している。和泉 A 遺跡の報告書（前掲）によると、富山県富山市北代加茂下Ⅲ遺跡でも二重柱穴列をもつ掘立柱建物の類例が一例発見されている。前高山遺跡・ナデッ原遺跡をはじめ勝坂タイプの環状集落に特徴的に見られる二重柱穴列の掘立柱建物は、北陸地方に由来する異系統家屋の可能性が高い。

勝坂 1 式期およびその直前に関東地方と北陸地方との間に交渉関係があったことは、土器型式要素の互換性からも確認できる。勝坂 1 式の主体をなす猪沢式・新道式土器は、隆帯区画とそれに沿って施文される角押文列を特徴とするものであるが、該期にはこれらとは別に、胴部に半肉隆線による B 字状文や三叉状陰刻文を特徴とする縦位区画文を配する土器群があり〔東京都八王子市榎原遺跡出土資料など〕、これが勝坂 2 式期に盛行する「パネル文（縦位区画文）」の原型となった。これは系統的には北陸地方の新崎式土器の型式要素が移入されたものである〔中西 1982, 谷口 1988〕。一方、新崎式土器の側にも隆帯区画と角押文による口縁部文様をもつものがあり、これは通常蓮華文など

を配する口縁部文様帯を勝坂1式（新道式）のそれに置換したものである。件の掘立柱建物は堅穴や土器埋設炉をもたないため、ほとんどの場合、明確な共伴遺物がない。したがってこれらが北陸系の家屋であることを搬入土器などで裏付けることは実際上困難だが、上記のような勝坂1式土器と新崎式土器との型式要素の互換的關係からも、両地域をつなぐ広域的な交渉關係があったことを推定し得る。

東京都忠生遺跡B地区B1地点の勝坂式期集落（前掲）でも、最大長約9mの二重柱穴列をもつ長方形掘立柱建物が4棟検出されている。前高山遺跡・ナデッ原遺跡の場合と異なるのは、それらの4棟が環状集落の西側の分節だけに存在し、東側には建てられていない点である（図3c）。忠生遺跡B地区B1地点の勝坂式期集落は、41棟の堅穴住居跡が東西の二大群に明瞭に分かれ、外径約100m、内径約30mの環状集落を構成している。4棟の長方形掘立柱建物は、西群の堅穴住居群の内側に、長軸を環の円周に沿わせた形で配置されており、反対側の東群にはない。二大群の片方だけに異系統家屋としての二重柱穴列掘立柱建物が偏在する事例として注目される。

同様の偏在性は、後述する東京都神谷原遺跡の勝坂式期集落（前掲）にも見られ、長径23mの二重柱穴列掘立柱建物が西側の堅穴住居群の内側に1棟だけ配置されている。また、神奈川県大熊仲町遺跡の勝坂式期集落（前掲）でも、二重柱穴列タイプ5棟を含む掘立柱建物は、堅穴住居群が描き出す環状の居住ゾーンの西側から南側に偏在している。

二重柱穴列をもつこれらの掘立柱建物の類例は、北陸地方と関東地方南西部のかけ離れた2地域にほぼ限られており、中間地帯での発見例は稀である（図4）。この分布傾向は石井が2001年時点で指摘していたとおりであり〔石井2001b〕、今回おこなった最新の事例集成でも状況は大きく変化していない。山梨県・長野県での事例が今後いくらか発見されたとしても、この分布傾向は基本的には変わらないと判断してよかろう。このタイプの掘立柱建物が北陸地方と関係をもつ異系統家屋であると考えた場合、隣接する地域や近隣の集落を介したりレー式の単純な伝播ではなく、特定の集落あるいは集団間をつなぐ直接的關係を想定しなければ説明の難しい現象といえる。しかも、その受容の仕方が集落によって、また二大群の分節単位によって一様でない点が、分節構造の成り立ちに一つの重要な示唆を与えているのである。

2-2. 関東地方南西部に出現した中信系の異系統家屋

関東地方南西部の勝坂式期集落には、長野県諏訪地方から八ヶ岳南麓地域に類例のある、中信系と推定される異系統家屋が存在する。東京都八王子市神谷原遺跡の勝坂式期集落を例に、具体的に検討する。

神谷原遺跡は多摩地域に点在する中期中葉の環状集落としては最も拠点的なものの一つであり、勝坂1式期から2式期にかけて約50棟の堅穴住居跡が残され、拠点集落形成の先駆けとなった集落の一つである（前掲）。また、同遺跡の近傍には小比企向原遺跡〔八王子市南部地区遺跡調査会編1998〕・滑坂遺跡〔八王子市南部地区遺跡調査会編1988〕・栲田遺跡〔八王子市栲田遺跡調査会編1976〕が位置し、この一帯は中期中葉から後葉にかけて造営された環状集落遺跡の集中する地域となっている。その一角を占める神谷原遺跡では、中期前葉の五領ヶ台Ⅱ式期にすでに住居や土壙墓群の造営が開始されており、この地域における遺跡群形成の先駆けとなった。そのような地域的動向を念頭

東京都神谷原遺跡 勝坂 1 式期(新道式)の集落構成

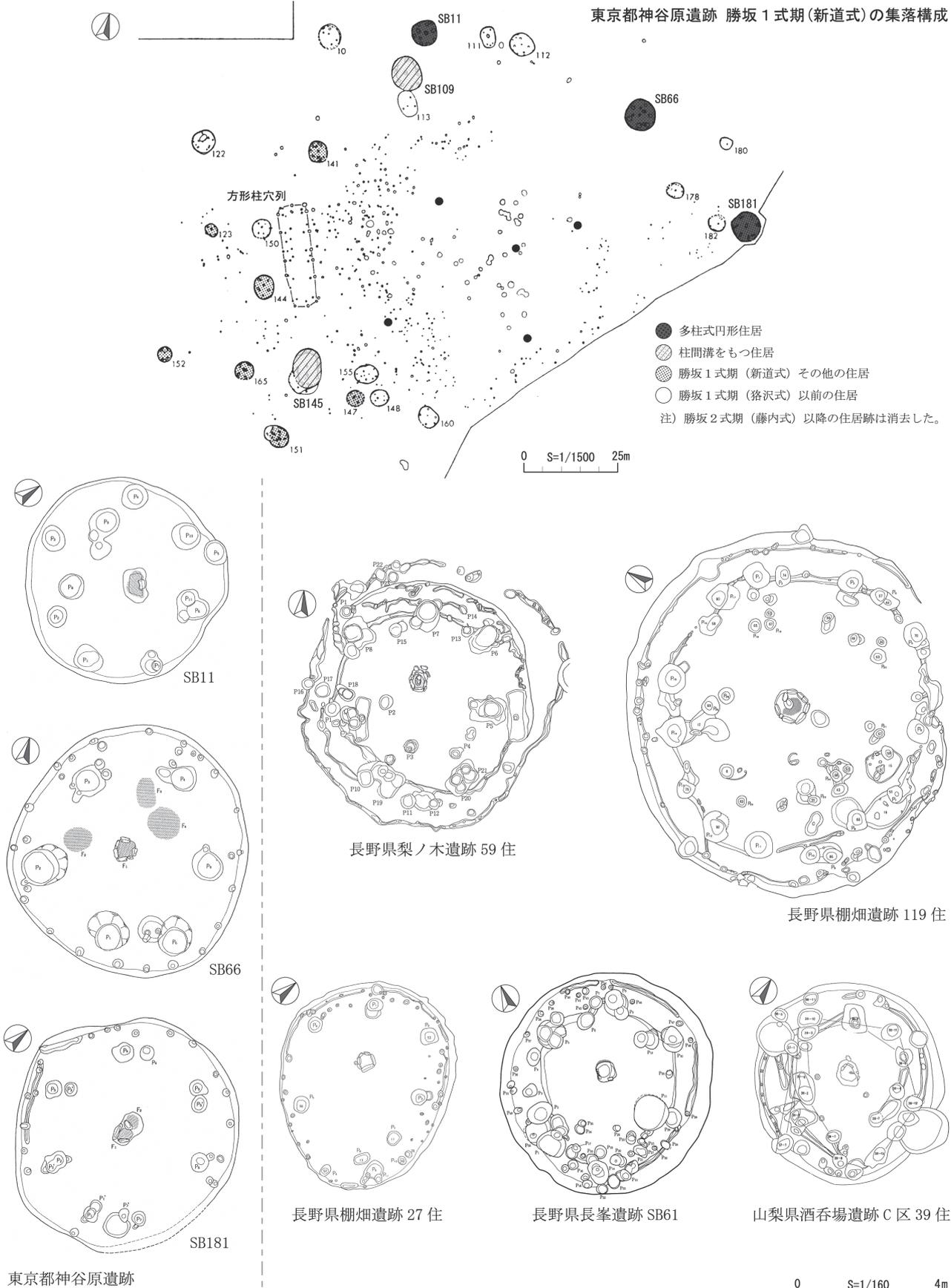


図5 東京都神谷原遺跡の石囲炉付き多柱式円形住居と類例

に、神谷原遺跡における集落形成の初期過程にあらためて注目し、ここでは環状の空間構成が明瞭となる勝坂1式期の集落構成を検討する(図5)。

勝坂1式古(貉沢式期)の12棟は、墓群のある広場を中心に北東群4棟と南西群8棟の二大群に分かれて分布し、南西群に約2倍の住居が偏在している。続く勝坂1式新(新道式期)の9棟も北東群のSB11, SB 66, SB 181と、南西群のSB 141, SB 123, SB 152, SB 165?, SB 151A, SB 147に分かれ、二大群を継承しているが、この時期になると二大群の間で住居型式の異質性が俄に際立ったものとなる。前段階から住居数が卓越する南西群では、長楕円形・円形4本柱で埋甕炉をもつ住居が継承されるなど、住居型式にそれほど大きな変化は認められない。ところが北東群ではそれまでとは異質な住居型式が唐突に出現しており、住居型式が刷新される。6~7本柱で石囲炉を有するその円形大形住居は、4本柱で埋甕炉を保持してきたそれまでの住居とはかなり異質である。

北東群に新たに登場したこの円形大形住居は、長野県塩尻市俎原遺跡55号[俎原遺跡発掘調査団編1986]、岡谷市梨久保遺跡91号[梨久保遺跡調査団編1986]、茅野市棚畑遺跡27号・119号・157号[棚畑遺跡発掘調査団編1990]、同市長峯遺跡SB64・SB61・SB176[長野県埋蔵文化財センター編2005]、原村大石遺跡3号[長野県中央道遺跡調査団編1976]、山梨県長坂町酒呑場遺跡C区39号[山梨県埋蔵文化財センター編1997]など、八ヶ岳南麓から諏訪湖盆、松本平南部にかけての集落に類例が見出される。図5に神谷原遺跡の3例と中信地域の類例を例示した。神谷原遺跡に突然現れた石囲炉をもつ多柱式の円形住居は、中部高地方面から移入された異系統家屋の可能性が強い。それを裏付ける一つの根拠として、住居廃絶時に石囲炉の縁石の一部を抜去する儀礼的行為に注目したい。神谷原遺跡北東群の件の3棟には、この種の儀礼行為の痕跡が共通して認められる。これは八ヶ岳南麓⁽³⁾や諏訪地方の中期集落に広く見られる住居廃絶時または更新時の一作法であり[鶴飼1990]、上記の見方の妥当性を裏付けるものである。

その蓋然性は、次に述べるもう一つの新出タイプの住居の出現を考え合わせるとさらに強まる。上述の3棟の円形大形住居に続き、それらにやや遅れてもう一つ別の特徴的な家屋が出現する。10本柱の楕円形大形住居のSB 109と、9本柱の楕円形大形住居のSB 145Bがそれであり、主柱穴の間を直線的な溝で連結する特徴をもつ(図7, No.16・No.17)。この種の溝にはいくつか異称があり、「間仕切溝」「ベッド状遺構」などと呼ばれることもあるが、ここでは小栗一夫[2003]の用語に従い「柱間溝」と称することにする。柱間溝をもつ同種の住居は、神谷原遺跡ではこの2棟しかなく、109号は北東側に、145号Bは南西側に位置している。柱間溝以外の属性でも、9本ないし10本の主柱をもつ上屋構造や、長径8~9m、短径6m以上に及ぶ大きさは、それ以前に神谷原遺跡に建てられた竪穴住居群とはまったく様相が異なり、前述の円形大形住居の場合と同じく唐突に出現した観が強い。2棟の住居の炉はやはり石囲炉で、これらの家屋でも炉石の抜き取りが行なわれている。

柱間溝をもつ楕円形の大型住居もまた、長野県茅野市棚畑遺跡(前掲)・長峯遺跡(前掲)・梨ノ木遺跡[茅野市教育委員会編2003]、原村大石遺跡(前掲)、塩尻市俎原遺跡(前掲)、山梨県長坂町酒呑場遺跡(前掲)、同石原田北遺跡[石原田北遺跡発掘調査団編2001]など、八ヶ岳南麓から諏訪盆地を中心に類例が分布し、初現期の勝坂1式期の事例は神谷原例を除けば同地域にほぼ限られている。神谷原遺跡の2例に最も類似した楕円形大形住居の類例としては、大石遺跡24号(新道式期)、棚畑遺跡104号(新道式期)、156号(貉沢式期)、119号(藤内I式期)、梨ノ木遺跡1号(新道式

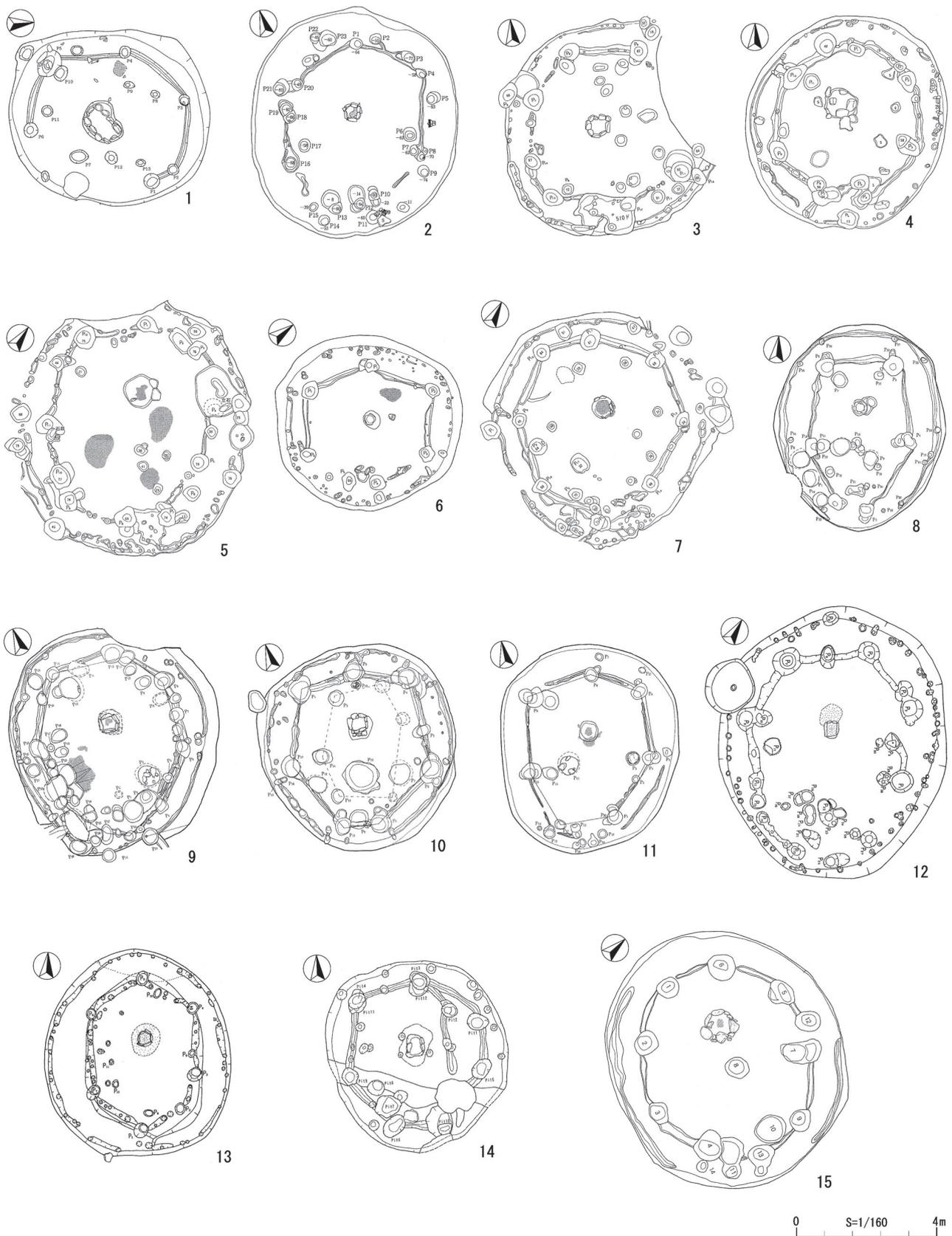


図6 柱間溝をもつ竪穴住居跡(1)

1. 開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡SI01 2. 梨ノ木遺跡1住 3. 棚畑遺跡85住 4. 同97住 5. 同100住 6. 同103住 7. 同111住 8. 長峯遺跡SB5
9. 同SB176 10. 同SB214 11. 同SB218 12. 大石遺跡24住 13. 同25住 14. 石原田北遺跡40住 15. 海道前C遺跡2住

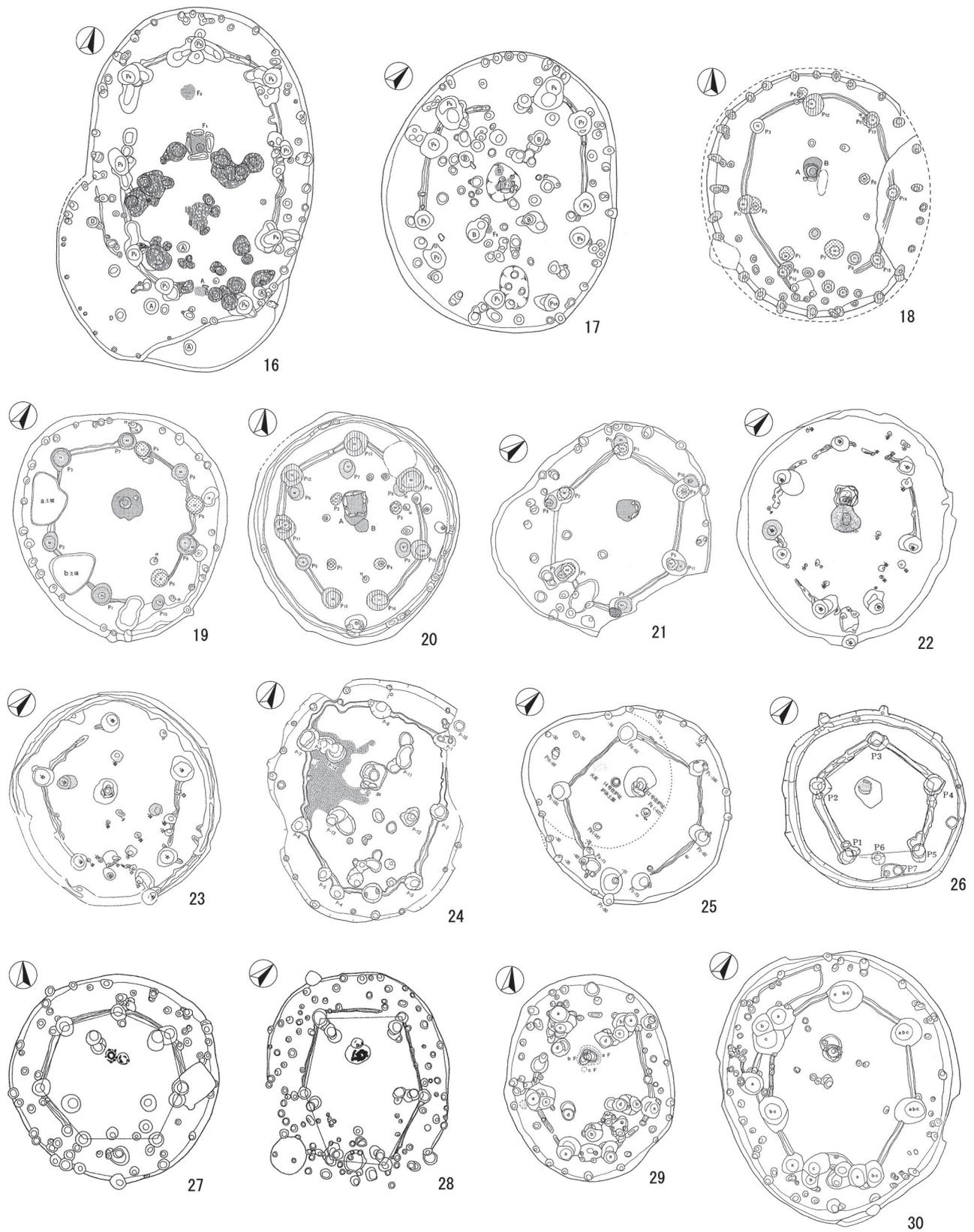


図7 柱間溝をもつ竪穴住居跡(2)

16. 神谷原遺跡SB109 17. 同SB145 18. 多摩ニュータウンNo.72遺跡334住 19. 同277住 20. 同324住
21. 同62住 22. 和田・百草遺跡SI6 23. 同SI7 24. 恋ヶ窪東遺跡SI27 25. 忠生遺跡A2地区12住
26. 杉久保遺跡36住 27. 三の丸遺跡BJ59 28. 同BJ79 29. 大熊仲町遺跡13住 30. 同83住

表2-1 柱間溝をもつ竪穴住居の事例集成(1)

遺跡No	事例No	所在地	遺跡名	遺構名	平面形	規模(m)		柱穴数	炉	テラス	周溝	壁柱穴	時期	文献
						長軸	短軸							
1	1	富山	開ヶ丘狐谷Ⅲ	SI01	円形	5.7	4.9	7	石組炉	(○)	-	-	中期中葉	報19
	2			SI03	隅丸方形	4.1	3.2	7	石組炉	(○)	-	-	中期中葉	
	3			SI07	長楕円形	7.5	4.5	10	石組炉	(○)	-	-	中期中葉	
	4			SI15	隅丸方形	-	3.6	4	石組炉	(○)	○	-	中期中葉	
	5			SI18	楕円形	4.9	3.6	8	石組炉	(○)	-	-	中期中葉	
2	6	長野	熊久保	10号住	円形	6.5	-	6	石開炉	-	○	-	-	報20
3	7			52住	楕円形	5.8	5.1	7	石開炉	-	-	-	藤内Ⅰ	報21
4	9	長野	組原	49住	円形	3.5	3.2	5	地床炉	-	-	-	藤内Ⅰ	報22
	10			53住	円形	4.9	4.4	-	-	-	-	-	曾利Ⅱ?	
11	103住			楕円形	5.4	4.4	5	石開炉	-	-	-	猪沢		
12	113住			楕円形	6.4	5.7	7	石開炉	-	-	-	藤内Ⅰ~Ⅱ		
13	120住			円形	4.2	3.9	4	地床炉	-	-	-	猪沢		
14	103住			円形	5.0	5.0	5	石開炉	-	○	-	猪沢	報23	
6	15		小池	198住	円形	5.6	5.4	7	石開炉	-	-	-	藤内Ⅱ	報24
7	16		峯畑	2号住	円形	6.6	6.5	8	石開炉	○	○	-	井戸尻	
17	9号住			(円形)	-	-	-	石開炉	○	○	○	藤内Ⅱ		
8	18		辻沢南	45号住	六角形	6.1	6.0	6	石開炉	-	○	-	唐草文系	報25
	19			50号住	五角形	6.2	5.6	6	石開炉	○	○	-	-	
	20			89号住	隅丸方形	5.2	4.9	6	石開炉	-	○	-	唐草文系	
9	21		丸山南	1住	楕円形	6.5	5.5	7?	石開炉	-	-	○	井戸尻Ⅲ	報26
	22	23住		-	-	-	石開炉	-	-	-	井戸尻Ⅱ			
10	23	千田川原田	8区-16住	卵形	8.7	6.6	7	地床炉	○	○	-	中期中葉新	報27	
11	24		J15	円形	5.3	5.2	6	石開炉	○	-	-	-	報28	
25	J51		円形	(4.8)	-	-	-	石開炉	-	-	-	新道		
12	26	中原梨ノ木	2号住	円形	5.7	-	7	石開炉	○	-	-	曾利Ⅰ	報29 報30	
13	27		1号住	楕円形	6.3	5.7	7	石開炉	(○)	-	-	新道		
	28		3号住	楕円形	5.2	4.5	4~6	埋葬炉	(○)	○	○	猪沢		
	29		4号住	楕円形	-	-	6	-	-	○	○	-		
	30		11号住	楕円形	6.0	5.5	7	地床炉	-	-	-	新道		
	31		18号住	楕円形	4.6	4.1	4	埋葬炉	-	-	-	新道		
	32		56号住	楕円形	-	-	6	-	-	○	○	新道		
	33		59号住	楕円形	7.5	7.3	9	石開炉	-	○	○	-		
	34		64号住	楕円形	5.1	4.3	7	石開炉	(○)	-	-	藤内Ⅱ		
	35		71号住	楕円形	7.0	5.9	9	石開炉	○	-	-	井戸尻Ⅰ~Ⅱ		
	36		76号住	楕円形	(5.3)	(5.1)	7	石開炉	-	○	○	藤内Ⅱ		
	37		87号住	楕円形	5.2	4.8	5	埋葬炉	-	○	○	新道		
	38		95号住	楕円形	5.1	4.2	7	石開炉	(○)	○	○	藤内Ⅰ		
	39		104号住	楕円形	6.6	6.2	9	石開炉	-	○	○	井戸尻Ⅲ		
	40		106号住	楕円形	6.4	(5.5)	10	石開炉	(○)	-	-	井戸尻Ⅰ~Ⅱ		
	41		107号住	楕円形	6.1	5.1	7	石開炉	-	○	○	藤内Ⅱ		
14	42	棚畑	37住	楕円形	6.3	5.7	7	石開炉	○	-	-	井戸尻Ⅰ	報31	
	43		44住	楕円形	7.0	6.8	8~10	石開炉	○	-	-	井戸尻Ⅰ		
	44		85住	円形	6.2	5.9	8	石開炉	○	○	○	藤内Ⅱ		
	45		89住	円形	7.0	-	8	石開炉	-	○	-	井戸尻Ⅱ		
	46		91住	楕円形	7.3	6.6	9	石開炉	-	-	○	藤内Ⅱ		
	47		97住	楕円形	8.2	5.7	7	石開炉	○	○	○	藤内Ⅱ		
	48		100住	楕円形	7.5	7.0	10~11	石開炉	○	-	○	井戸尻Ⅲ		
	49		103住	円形	5.3	5.0	7	埋葬炉	○	-	○	猪沢		
	50		104住	円形	8.9	8.5	7	埋葬炉	○	-	○	猪沢		
	51		106住	楕円形	6.5	5.2	7	石開炉	○	-	-	藤内Ⅰ		
	52		108住	円形	4.8	4.2	6	石開炉	-	○	○	藤内Ⅰ		
	53		110住	楕円形	5.0	4.6	8	石開炉	-	-	-	井戸尻Ⅰ		
	54		111住	円形	6.8	6.5	8	石開炉	-	○	○	藤内Ⅰ		
	55		119住	楕円形	10.5	9.0	-	石開炉	○	○	○	藤内Ⅰ		
	56		142住	楕円形	6.5	5.8	6?	石開炉	○	○	○	藤内Ⅰ		
	57		150住	楕円形	6.2	6.0	6?	石開炉	○	○	○	藤内Ⅱ		
	58		151住	楕円形	6.2	4.8	7	石開炉	○	○	-	藤内Ⅱ		
	59		157住	楕円形	(10)	(8.3)	-	石開炉	-	-	○	猪沢		
15	60	目向上	-	-	-	-	石開炉	-	-	-	曾利	報29		
16	61	林の峰	3号住	円形	6.0	5.8	6	石開炉	-	-	-	-	報32	
17	62	長峯	SB4	長楕円形	6.2	(5.9)	5	埋葬炉	○	○	○	猪沢~新道	報33	
	63		SB5	長楕円形	5.9	5.0	6	埋葬炉	○	○	○	猪沢~新道		
	64		SB14	楕円形	-	-	5	埋葬炉	○	○	○	新道		
	65		SB17	楕円形	-	-	7	地床炉	(○)	○	-	藤内		
	66		SB30	隅丸五角形	5.8	5.7	5	石組炉	○	○	-	曾利Ⅱ		
	67		SB45	-	-	-	-	-	-	○	-	曾利Ⅳ		
	68		SB54・55	円形	-	(5.2)	5	石開炉	○	○	○	藤内		
	69		SB63	略円形	5.2	5.1	4	埋葬炉	-	○	○	藤内		
	70		SB64	楕円形	5.9	(5.1)	6	石開炉	-	○	○	新道		
	71		SB66	楕円形	-	-	7	石開炉	-	-	-	藤内		
	72		SB138	(円形)	-	-	8	石開炉	-	○	-	曾利Ⅱ		
	73		SB156	円形	5.5	5.4	6	石開炉	○	○	○	新道		
	74		SB176	楕円形	6.5	6.0	9	石開炉	○	○	○	藤内~井戸尻Ⅰ		
	75		SB185	楕円形	6.8	(6.4)	8	石開炉	-	○	○	藤内		
	76		SB187	楕円形	(5.6)	5.0	7	石開炉	-	○	○	藤内		
	77		SB190	(楕円形)	-	-	5	石開炉	(○)	-	-	藤内		
	78		SB202	円形	-	-	9	石開炉	-	○	○	井戸尻Ⅲ		
	79		SB211	(円形)	-	-	-	-	-	-	-	曾利Ⅳ		
	80		SB214	円形	5.8	5.7	7	石開炉	○	○	○	井戸尻Ⅰ		
	81		SB218	楕円形	5.9	5.1	7	地床炉	○	○	-	藤内		

注1)長野・山梨県は「井戸尻編年」、東京都・神奈川県は「勝坂編年」で時期表記

注2)テラス欄(○):段差が不明確で壁に向かい傾斜をもつもの

表2-2 柱間溝をもつ竪穴住居の事例集成(2)

遺跡No.	事例No.	所在地	遺跡名	遺構名	平面形	規模(m)		柱穴数	炉	テラス	周溝	壁柱穴	時期	文献			
						長軸	短軸										
18	82	長野	尖石	11住	-	-	-	-	-	-	-	-	藤内I	報34			
19	83			大石	13号住	楕円形	6.4	4.7	4~6	埋焼炉	-	-	-	-	新道	報35	
	84				24号住	楕円形	7.7	6.5	8	石囲炉	○	-	○	-	新道		
	85				25号住	楕円形	5.9	5.3	6	石囲炉	○	-	-	-	新道		
20	86		徳久利	立沢	12号住	楕円形	7.2	6.0	8	石囲炉	○	-	-	猪沢	報36		
21	87				1号住	円形	6.0	-	-	地床炉	-	-	-	-	藤内I		
22	88				九兵衛尾根 藤内	2号住	楕円形	6.0	5.2	7	地床炉	○	-	-	-	-	
23	89					2号住	楕円形	6.8	5.7	7	石囲炉	-	-	-	-	井戸尻II	
	90					3号住	円形	6.0	5.7	7	石囲炉	-	-	-	-	井戸尻II	
	91					7号住	円形	5.4	5.1	6~7	石囲炉	○	-	-	-	井戸尻I	
	92	9号住	円形	5.4	-	6~7	石囲炉	-	-	-	-	井戸尻II					
24	93	山梨	古林第4 寺所第2	16号住	楕円形	8.2	6.6	8	石囲炉	-	-	-	藤内	報37			
25	94			T-37号住	楕円形	-	-	7	石囲炉	-	-	-	-	藤内	報38		
26	95		酒呑場	甲ッ原	45-B住	-	-	6	石囲炉	-	-	-	-	新道	報39		
27	96				14住	円形	5.0	4.3	7	石囲炉	-	○	-	-	井戸尻III	報40	
	97				31住	円形	6.8	6.4	8	石囲炉	-	-	-	-	猪沢		
	98				39住	円形	-	-	-	石囲炉	-	-	-	-	新道		
	99				48住	楕円形	7.1	6.4	7	石囲炉	-	○	○	-	井戸尻III		
	100				55住	楕円形	6.4	5.8	7	石囲炉	-	○	-	-	井戸尻		
	101				79住	-	-	-	-	石囲炉	-	-	○	-	新道		
	102				91住	円形	6.3	6.2	7	地床炉?	-	○	-	-	井戸尻III		
	103				96住	円形	6.2	5.9	7	石囲炉	-	○	-	-	井戸尻II		
	104				99住	円形	5.9	(5.5)	7	石囲炉	-	-	-	-	井戸尻III		
28	105		石原田北	20住	楕円形	6.3	5.6	7	石囲炉	○	-	-	-	新道2	報41		
	106				楕円形	7.2	6.7	7	石囲炉	○	○	○	-	新道2			
	107				楕円形	5.4	5.1	7	石囲炉	○	-	○	-	新道2			
	108				楕円形	7.3	6.5	10	石囲炉	○	○	-	-	-	新道2		
29	108		海道前C	石之坪	2号住	楕円形	7.3	6.5	10	石囲炉	○	○	-	-	-	報42	
30	109				4号住	楕円形	6.4	4.8	7	埋焼炉?	○	○	-	-	藤内	報43	
	110		11号住	楕円形	6.2	5.6	7	埋焼炉?	○	-	○	-	藤内II				
31	111		東京	滑坂	02A住	楕円形	4.5	3.5	6	石囲炉	-	-	-	勝坂2	報44		
	112	13住			楕円形	6.1	5.2	7	石囲炉?	-	-	-	-	勝坂3			
	113	30住			楕円形	4.7	3.9	4	-	-	-	-	-	勝坂2			
	114	35住			楕円形	4.1	3.9	4	石囲炉	-	-	-	-	勝坂2			
	115	39住			楕円形	4.5	4.0	5	石囲炉	-	-	-	-	勝坂3			
	116	64住			円形	4.8	4.8	5	石囲埋焼炉	-	-	-	-	勝坂2			
	117	85住			楕円形	-	-	4	埋焼炉	-	-	-	-	勝坂3			
	118	神谷原			SB109A	楕円形	7.8	6.5	10	石囲炉	-	-	○	-	勝坂1	報3	
	119			SB145B	楕円形	7.0	4.6	9	石囲炉	-	-	-	-	勝坂1			
32	120	TNT No107		8号住	-	-	-	6	石囲炉	-	-	-	-	勝坂2	報45		
	121				28号住	-	-	-	6	石囲埋焼炉	-	-	○	-	勝坂2		
34	122	TNT No72		62住	楕円形	6.0	5.5	6	石囲炉	-	-	○	-	勝坂2	報46		
	123				楕円形	6.0	5.1	7	石囲埋焼炉	-	-	○	-	勝坂3			
	124				楕円形	6.8	(5.2)	7	石囲炉	-	-	-	-	勝坂2			
	125				238住	円形	4.6	4.5	5	石囲埋焼炉	-	○	-	-	勝坂3		
	126				277住	楕円形	6.4	6.0	7	埋焼炉	-	-	○	-	勝坂3		
	127		324住		楕円形	6.4	5.8	7	-	-	○	-	-	勝坂3			
	128		329住		五角形	6.0	5.8	-	-	-	-	-	-	-	-		
	129		334住		楕円形	6.8	5.9	8	石囲埋焼炉	-	-	○	-	-	勝坂3		
35	130		和田・百草		6住	楕円形	6.7	6.0	8	石囲(埋焼)炉	-	-	-	-	勝坂3	報47	
	131					7住	円形	6.0	6.0	5	石囲埋焼炉	-	○	-	-	勝坂3	
	132	8号住		略円形		5.7	5.4	6	埋焼炉	-	○	○	-	勝坂2	報48		
37	133	TNT No3	10号住	楕円形?	-	-	6	石囲炉	-	-	○	-	勝坂	報49			
38	134	恋ヶ窪東	S127J	隅丸方形	6.8	5.2	7	地床炉	(○)	-	○	-	勝坂	報50			
	135			S134J	円形	6.0	-	-	埋焼炉	(○)	-	○	-	勝坂末?			
39	136	井の頭池 西台	9a住	楕円形	5.1	4.3	6	地床炉	-	-	-	-	勝坂2	報51			
40	137			8住	-	-	-	-	(○)	-	○	-	勝坂3	報52			
	138			10住	隅丸方形	-	-	-	埋焼炉	-	○	○	-	勝坂3			
41	139	明治薬科大 堂ヶ谷戸	33号住	楕円形	4.9	4.2	5	地床炉	-	-	-	-	勝坂3	報53			
42	140			216住	円形	4.8	4.8	5	地床炉	-	○	○	-	勝坂末	報54		
	141			218住	不整形	4.3	(2.8)	-	埋焼炉	-	-	-	-	勝坂3			
43	142	等々力原I 鶴川	1号住	楕円形	(5.2)	(4.1)	-	埋焼炉	-	-	-	-	勝坂	報55			
44	143			J18	楕円形	5.8	5.1	6	埋焼炉	-	○	-	-	勝坂3	報56		
45	144	忠生A1地区	A1-8号住	楕円形	4.6	3.7	4	石囲炉	-	○	○	-	勝坂3	報57			
	145			A1-34号住	円形	3.9	3.6	4	埋焼炉	(○)	-	-	-	勝坂2			
	146			A1-138号住	不明	約5	約4.4	4	埋焼炉	-	-	-	-	勝坂2			
	147			A2-6号住	楕円形	4.6	3.8	4	埋焼炉	(○)	-	-	-	勝坂2	報58		
	148	A2-12号住	円形	5.5	5.5	6	石囲炉	(○)	-	○	-	勝坂2					
	149	A2-13号住	楕円形	5.5	4.8	4	埋焼炉	(○)	-	○	-	勝坂2					
46	150	忠生B地区	B1-1号住	円形	4.6	4.2	5	石囲埋焼炉	-	○	○	-	勝坂3	報4			
	151			B1-18号住	円形	6.2	6.1	4	-	-	-	○	-	勝坂2			
47	152	木曾森野南	2号住	-	-	-	-	石囲炉	-	-	○	-	勝坂3	報59			
	153			21号住	-	-	-	-	石囲埋焼炉	-	-	-	-	勝坂3			
48	154	神奈川	下原	A3-a	-	-	5	埋焼炉	-	-	-	-	勝坂2	報60			
	155			A3-b	楕円形	6.9	5.4	9	埋焼炉	-	-	-	-	勝坂2			
	156			A11	円形	-	-	5?	地床炉?	-	-	-	-	勝坂2			
	157			A12	楕円形	5.7	4.5	6?	地床炉?	-	-	-	-	勝坂2			
	158			A25	楕円形	3.4	3.0	5	石囲炉	○	-	○	-	勝坂2			
	159			B12	楕円形	7.3	5.7	7	石囲炉	-	-	○	-	勝坂2			
	160			B35	楕円形	5.3	4.8	5	埋焼炉	○	-	-	-	勝坂2			
	161			B37	楕円形	(6.8)	(5.4)	6	石囲炉	-	-	-	-	勝坂3			
49	162			下中丸	2住	円形	5.5	5.5	7	石囲炉	-	-	○	-	勝坂	報61	
	163					4住	円形	4.6	(4.3)	(5)	石囲炉	-	-	○	-	勝坂3	

表 2-3 柱間溝をもつ竪穴住居の事例集成 (3)

遺跡No	事例No	所在地	遺跡名	遺構名	平面形	規模(m)		柱穴数	炉	テラス	周溝	壁柱穴	時 期	文 献
						長軸	短軸							
50	164	神奈川	上中丸	11住	円形	5.0		7	石囲埋堯炉	-	-	-	勝坂 2	報62
	165			20住	円形	5.5	5.3	5?	石囲炉	-	○	-	勝坂 2~3	
	166			70住	円形	4.5	4.5	5	石囲炉	-	-	-	勝坂 3	
	167			117住	円形	5.0		6	土器撒炉	-	-	○	曾利系	
51	168	恩名沖原		34号住	楕円形	5.5	4.9	5?	石囲炉	-	○	-	勝坂 3	報63
	169			73号住	楕円形	5.6	4.6	6	石囲埋堯炉	-	○	○	勝坂 3	
52	170	望 地		2号住	楕円形	4.7	4.0	6	石囲埋堯炉	-	○	○	勝坂 3	報64
53	171	杉久保		8号住	円形	6.9	6.7	7	埋堯炉	-	-	-	勝坂 2	報65
	172			9号住	円形	5.2		5?	埋堯炉	-	-	○	勝坂 2	
	173			13号住	円形	(5.1)		5?	地床炉	-	-	○	勝坂 2	
	174			29号住	楕円形	6.3	5.9	6	石囲炉	-	○	-	勝坂 3	
	175			36号住	円形	5.1	5.0	5	埋堯炉(浅鉢)	-	○	-	勝坂 3	
	176			38号住	楕円形	7.0	5.8	7	石囲炉	-	○	-	勝坂 3	
	177			42号住	楕円形	(4.8)	(4.2)	-	-	-	-	○	勝坂 3	
	178			46号住	円形	5.0	4.6	5	地床炉?	-	○	-	勝坂 3	
	54			179	南 原 (連絡道路)		8b号住	不整円形	5.0	5.0	6	石囲埋堯炉	-	
180		14号住	不整円形	5.5			5.7	6	埋堯炉	-	-	○	-	
181		2号住	不整円形	約4.4			約4.4	5	石囲埋堯炉	-	-	○	-	
55	182	岡 田		190号住	楕円形	4.6	4.1	6	地床炉	-	○	-	勝坂 3	報68
	183			256号住	隅丸方形	4.5	4.5	5	地床炉	-	○	-	勝坂 3	
	184			258号住	隅丸方形	5.0	5.0	5	埋堯炉	-	○	-	勝坂 3	
	185			263号住	楕円形	4.6	4.0	8	土器囲い炉	-	○	-	勝坂 3	
	186			265号住	楕円形	5.1	4.7	5	埋堯炉	-	○	-	勝坂 3	
	56			187	原 口	J25	円形/楕円	約5.8	約5.1	6	地床炉	-	○	
57	188	高 山	1号住	楕円形	約6.4	約5.6	6	埋堯炉	-	○	-	-	報10	
58	189	小 丸	53号住	円形	6.3	6.0	7	埋堯炉	-	○	-	勝坂 3	報70	
59	190	三の丸		BJ59	円形	5.9	5.8	7	石囲埋堯炉	-	○	○	勝 坂	報12
	191			BJ79	円形	6.2	5.2	6	石囲埋堯炉	-	-	○	勝 坂	
60	192	大高見		J15	楕円形	5.5	4.7	4	石囲埋堯炉	-	-	○	勝 坂	報71
	193			J22	楕円形	6.5	5.6	6	石囲埋堯炉	(○)	-	○	勝 坂	
	61			大熊仲町		J4号住	楕円形	6.9	5.2	7	石囲埋堯炉	-	-	
194	J6号住	楕円形	-			-	6	埋堯炉	-	-	○	勝 坂		
195	J13号住	楕円形	5.9			4.8	6	地床炉	-	-	○	勝 坂		
196	J35号住	楕円形	5.9			5.2	6	石囲埋堯炉	-	○	-	勝 坂		
197	J42号住	楕円形	7.5			5.5	8	埋堯炉	-	-	○	勝 坂		
198	J83号住	楕円形	7.8			6.9	7	石囲埋堯炉	-	-	○	勝 坂		
199	J101号住	楕円形	3.4				6	埋堯炉	-	-	○	勝 坂		
200	J116号住	楕円形	6.6			5.6	7	埋堯炉	-	-	○	勝坂 3		
201	J119号住	楕円形	-			-	-	石囲炉	-	-	-	勝 坂		
202	J123号住	円形	5.8			5.4	6	石囲埋堯炉	-	-	○	勝 坂		
203														
62	204	宿根西		12号住	楕円形	7.7	6.4	8?	石囲埋堯炉?	-	-	○	勝坂 3	報72
63	205	下永谷6丁目		J2号住	楕円形	4.8	約4	5	埋堯炉	-	-	○	勝坂末	報73
	206			J3号住	楕円形	約5.4	-	6~9	埋堯炉	-	-	○	勝 坂	

期), 長峯遺跡 SB5 (貉沢~新道式期) などが典型的である。図 6・図 7 に中信地域と関東地方南西部を中心に分布する主な事例を示した。

柱間溝をもつ竪穴住居跡は、現時点で 63 遺跡 206 例が確認される⁽⁴⁾(表 2-1・表 2-2・表 2-3)。その分布状態は図 8 に示すとおり、中信地方および八ヶ岳南麓と関東地方南西部にほぼ限られており、中間にあたる甲府盆地にはほとんど見られない。神谷原遺跡に突然現れた 2 棟は、中信地方に由来する異系統家屋の可能性が高い。その後、勝坂 2 式期(藤内式期)になると受容の動きが加速し、関東地方南西部の多くの集落にこのタイプの住居が受容されるようになる(表 2-2・表 2-3, 図 8)。

神谷原遺跡の新道式期に現れた家屋の変化を整理してみると、南西群が在地的な伝統を維持したのに対して、北東側の居住者がまず中信地方に通じる異系統家屋(円形大形住居)や付帯する文化要素(炉石の抜き取り)を積極的に受容した形跡がある。やや遅れて別種の異系統家屋(多柱・柱間溝のある楕円形大形住居)が受容され、北東側と南西側の双方に 1 棟ずつ配置された。なお、確実に共伴する遺物がなく帰属時期の判断が困難だが、長径約 23m の二重柱穴列掘立柱建物が南西群の竪穴住居群の内側に 1 棟だけ配置されている。これを北陸地方に通じる異系統家屋と考えるなら、南西群の居住者が北陸地方との間に社会関係を保持していた可能性も考えられる。

神谷原遺跡における環状集落と分節構造の形成過程には、このように中信地方と北陸地方に共通

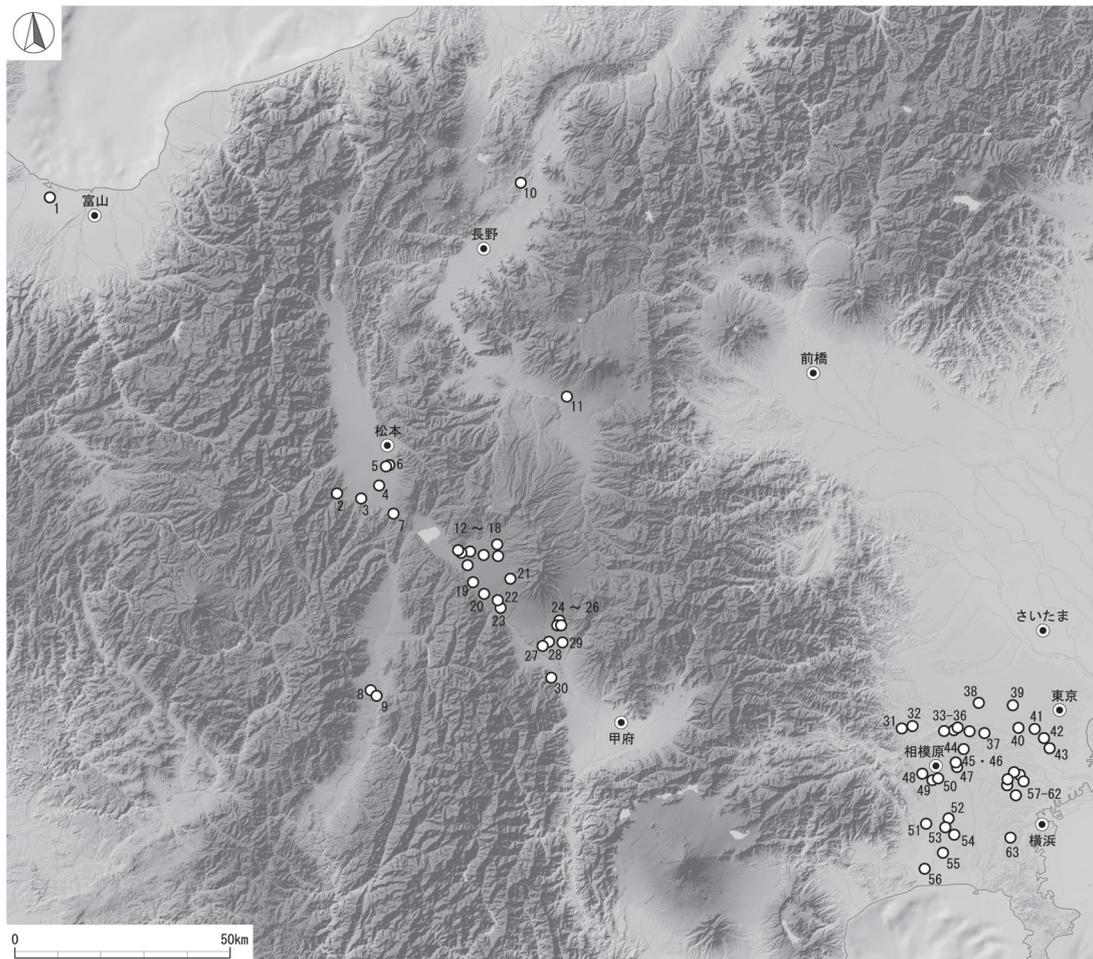


図8 柱間溝をもつ竪穴住居跡の地理的分布

1. 開ヶ丘狐谷Ⅲ
2. 熊久保
3. 平出
4. 俎原
5. 一ツ家
6. 小池
7. 峯畑
8. 辻沢南
9. 丸山南
10. 千田
11. 川原田
12. 中原
13. 梨ノ木
14. 棚畑
15. 日向
16. 林の峰
17. 長峯
18. 尖石
19. 大石
20. 徳久利
21. 立沢
22. 九兵衛尾根
23. 藤内
24. 古林第4
25. 寺所第2
26. 甲ッ原
27. 酒呑場
28. 石原田北
29. 海道前C
30. 石之坪
31. 滑坂
32. 神谷原
33. TNT No107
34. TNT No72
35. 和田・百草
36. TNT No520
37. TNT No3
38. 恋ヶ窪東
39. 井の頭池
40. 西台
41. 明治薬科大
42. 堂ヶ谷戸
43. 等々力原I
44. 鶴川
45. 忠生A1・A2地区
46. 忠生B地区
47. 木曾森野南
48. 下原
49. 下中丸
50. 上中丸
51. 恩名沖原
52. 望地
53. 杉久保
54. 南原
55. 岡田
56. 原口
57. 高山
58. 小丸
59. 三の丸
60. 大高見
61. 大熊仲町
62. 宿根西
63. 下永谷6丁目

する数種の異系統家屋が相次いで受容されており、遠隔地につながる複雑な社会関係が背後に存在したことを示唆している。

2-3. 小 結

ここで検討した事例数は十分なものではないが、勝坂式期における異系統家屋の存在を具体的に指摘した。とくに注目したいのは、現象面に認められる次の二つのパターンである。

第一に、異系統家屋の伝わり方が、隣接する地域や集落を順に経由した玉突き式の単純な伝播ではなく、地域や距離を大きく隔てた、遠隔地間の直接的関係を強く示唆している点である。二重柱穴列の掘立柱建物は新潟県上越地方と関東地方南西部に大きく飛び離れて分布しており（図4）、柱間溝をもつ楕円形の大型竪穴住居もまた同様に長野県諏訪地方から八ヶ岳南麓一帯と関東地方南西部に大きく離れた分布状態を示している（図8）。中間地域を跨いだ遠隔地間の関係性と伝わり方を

端的に示すものである。

第二に、環状集落において中央の空間を挟んで対向する二大群の間で、異系統家屋の受け入れ方が異なる場合があることである。二大群の分節間で竪穴住居の型式・形態が異なる場合があることは、勝坂式期に限らず、中期の環状集落にしばしば見られる現象である。それについては、これまでの論考の中でもすでに指摘した [谷口 2002・2005]。前述の神谷原遺跡の事例は、二大群の分節間で住居型式の選択に違いが起こり得ることを示している。神谷原遺跡の例では、中信系の竪穴住居型式や二重柱穴列の掘立柱建物の集落内の位置が明らかに偏っており、二大群の異質性を際立たせていた。また、北陸系の異系統家屋と推定される二重柱穴列の掘立柱建物についても、環状集落の片側だけに偏在するあり方が、東京都忠生遺跡 B 地区 B1 地点や神奈川県大熊仲町遺跡に共通して認められた。

異系統家屋を手がかりとして考えると、それぞれのセクションに異質な家屋を造営した二つのグループの人々は、異なった伝統や慣習を保持しており、集落の範囲を超えて他地域に広がる社会的関係を有していた可能性がある。勝坂式期に形成され始めた拠点的な環状集落は、そのような複数の、系統の異なる単位集団によって構成されていたと推察されるのである。

③……………考察 —異系統共存現象を生む社会関係—

3-1. 異系統家屋に関連する先行研究と論点整理

中期前葉から中葉にかけて、環状集落の造営が活発化し分節構造が顕在化していく過程では、集落や地域を超えた社会関係があったことが、異系統家屋の検討から浮かび上がってきた。勝坂式期、とくにその成立段階から前半にかけての時期に、関東地方と中部地方・北陸地方との間に緊密な関係があったことは、これまでの集落研究の中でもさまざまに論じられてきた。考察に進む前に、関連する先行研究を取り上げ、住居の形態・型式・系統に対する各論者の見方や説明法を対比的に検討しながら、論点と課題を整理しておきたい。

中期前葉における地域文化と集団関係について竪穴住居の分析から論じたものとして、小林謙一の研究 [小林 1990] が挙げられる。勝坂式土器を用いる中部高地・西関東の地域文化と、阿玉台式土器を用いる東関東の地域文化のそれぞれに、伝統的な住居の系統があることを確認するとともに、二つの地域文化が交流し相互関係を深める過程で、住居の形態や炉の型式などの要素が相互に影響し合っ変化が生じている点を、綿密な事例の集成・分析から明らかにしている。勝坂文化の住居の要素が次第に阿玉台文化に取り入れられることや、中間地帯で折衷タイプの住居が現れている点など、重要な指摘を含む。家屋の型式や系統を集団や地域文化の指標とみなし、地域間の集団関係の中で住居の要素が相互に影響し合い折衷的な様相が生み出される、というのが同論文での小林の基本的な見方である。小林はそれを生活文化や居住行動の相異あるいは変化に還元して解釈される問題と考えている。

前章で検討した二重柱穴列の掘立柱建物については、掘立柱建物の基礎的分類がおこなわれた初期の研究の中で、北陸・東北地方における大形住居との関係が予察されていた [佐々木 1984, 石井

1989]。石井寛は、横浜市港北ニュータウン地域遺跡群におけるD群掘立柱建物の出現について、阿玉台I b式期から勝坂2式期にかけての土器型式の変化と関連づけて説明する視点を示し、阿玉台系の住居が見られた段階と掘立柱建物が出現する段階との間の質的な違いに言及して、こうした現象の背後に地域間の社会関係の変化があったと論じている[石井1989]。その後、新潟県和泉A遺跡と富山県北代加茂下Ⅲ遺跡でD群の類例が発見されたことを受けて、D群掘立柱建物の系譜と性格について再論し、慎重な表現ながら、北陸地方の長方形大形住居からの系譜を有する貯蔵機能を備えた施設との見方を示した[石井2001b]。中期前葉～中葉の港北ニュータウン地域では、それまで優勢であった阿玉台式に代わって勝坂式土器が主体的となる過程で、さまざまな系譜の集団が入り込み、以後の地域社会の基礎が形成された可能性があるという。掘立柱建物が集落の一角に集中する大熊仲町遺跡について、集落内の一角を特定の集団が占拠していたこともあり得るとも述べている点は、本論での議論に関わる重要な見方である。石井もまた、同種・同系統の家屋を地域集団ないし地域文化の指標とみなす考え方を採っており、集団関係による相互作用を通して変化や移入が起こるという見方が示されている。なお、後期の掘立柱建物に関する石井の近年の研究の中にもそうした説明法が表れており、柄鏡形住居の系統を引く竪穴住居と掘立柱建物とを系統の異なる家屋と考え、それを受け継ぐ集団の差に還元して説明している[石井2007]。

前章で異系統家屋の可能性を指摘した「柱間溝」をもつ大形住居については、小葉一夫が類例の集積に基づく基礎的研究をおこなっている[小葉2003]。長野県・山梨県・東京都・神奈川県における44遺跡132棟の資料集成に基づき、同種の住居の時空分布を明らかにしている。本論に関わってとくに注目されるのは、同種の住居が勝坂式土器の分布圏内に一様に広がっているのではなく、八ヶ岳南麓・諏訪盆地を中心とした中部高地と、関東地方南西部とに分布する状態を明らかにした点である。同論文に示された分布図からは、小葉が指摘するように現在甲州街道が通るルートに沿って伝達された可能性が高いことが読み取れるが、中間にあたる甲府盆地を飛び越えた、不連続な分布状態を示している点に重要な意味が窺える。また、同種の住居は拠点集落に少数が残されている場合が多い、との指摘も重要である。同論文での小葉の考察は、「柱間溝」をもつ住居の内部構造とその機能に重点が置かれており、その起源や系統についての判断は控えているが、単純な伝播論的説明ではなく、拠点的な大規模集落に同種の家屋が移入されている点を指摘した点が、筆者には示唆的で重要に思える。

これらの諸研究は、勝坂式期における広域的な地域間の社会関係の中で、竪穴住居や掘立柱建物の型式や要素が移入されたり折衷されたりすることを指摘しており、中期集落の研究に一つの重要な視点を提起するものである。いずれも異系統家屋の問題認識につながる重要な先行研究として注目したい。しかしながら、このような問題が環状集落の形成、とくに分節構造の成り立ちにどのように関係しているのか、という問題意識はこれらの論考にはなく、異系統家屋ないし異系統の要素が集落内のどのセクションにどのように移入されているのかという点は、大熊仲町遺跡に関する石井の先の言及以外はとくに検討されていない。

以下の考察では、異系統家屋の諸現象を環状集落論の中に置き直して、あらためてその意味を考えてみたい。とくに分節構造の形成過程で、異系統家屋がどのように伝達・受容されるのかという点に目を向けたい。中期環状集落の形成が本格化し始める勝坂式期には、遠隔地との直接的関係や

交渉があり、土器型式だけでなく家屋の型式が伝えられることがあった。しかも、そうした社会関係が集落を一単位としたものでは必ずしもなく、環状集落を構成する分節単位ごとに異なった動きや傾向を見せる場合があることに注目すべきである。中期における環状集落の発達と分節構造の発生の背景には、予想以上に複雑な社会関係があったと考えなければなるまい。

3-2. 土器型式の異系統現象との関連性

環状集落における拠点形成および分節構造の発現が進んだ中期前葉から中葉には、縄文土器型式の様相にも複雑な動きが生じており、異系統家屋との関連性を示唆する興味深い現象が見られる。

中期環状集落の造営が活発となる前段階の様相については、中期初頭の五領ヶ台式前半期の土器群に関する山本典幸の研究により、興味深い事実が明らかとなっている [山本 2002・2008]。五領ヶ台式前半期には「集合沈線文系列」と「細線文系列」の2系列の異質な土器群が併存しており、関東地方から中部高地に分布する前者と、関東地方から東北地方に分布する後者が、現象的には関東地方でその分布を交錯させている。2系列の土器群はそれぞれ荷担者集団が異なり、前者は中部高地方面との交流、後者は東北地方方面との交流をもち、それぞれに異なる社会関係を取り結んでいたことを推測させる現象である。中期初頭には、中部高地方面や東北方面から、系統の異なる土器文化を保持する集団が、前期末以来遺跡の激減していた関東地方に往来するようになり、何らかの交渉や接触を持ち始めていた可能性がある。東京都八王子市郷田原遺跡で発見された前期末・中期初頭（五領ヶ台Ⅰa式期）の2棟の長方形大形住居 [八王子市南部地区遺跡調査会編 1996] は、東北地方との直接的交渉または集団の往還を強く示唆するものであり、そのような推測を裏付ける。

中期環状集落の造営が本格化する中期前葉から中葉には、異系統の文様要素を合体させた所謂「キメラ的土器」や折衷土器がとくに数多く見られる。佐藤達夫は五領ヶ台式から勝坂式に遷り変わる時期に、一個体の土器に異系統の文様が共存する事例が顕著に見られることに注目し、婚姻関係などによる地域を超えた人の動きを想定した [佐藤 1974]。佐藤がキメラ的土器の実例として挙げた東京都八王子市榎原遺跡出土の土器は、五領ヶ台式上層式ないし貉沢式の要素である角押文の口縁部文様と、北陸地方の新崎式の特徴をもつ胴部の縦位区画文を、個体内に合体させたものであり、関東的要素と北陸的要素とを合成した土器の一例である。五領ヶ台式終末期から勝坂Ⅰ式期にかけての時期に、異系統土器の共伴例や異系統の要素を併せもつ折衷土器が増加することは、広汎に見られる現象として認識されている [小林 1984・2011 など]。また、勝坂Ⅰ式期には、長野県・山梨県・東京都・神奈川県・埼玉県にまたがる広い地域で多数の遺跡に同一の土器文様が共有化される現象が見られ、中間地域を飛び越した遠隔地の特定の集落間で文様要素が共有されるケースも捉えられている [今福 1993・2008]。情報や人の動きが活発で広域的なものとなり、異系統の型式の接触と折衷、あるいは融合と同一化が顕著に起こっていた状況が窺える。

一個体の土器あるいは土器組成の中に異系統の型式が共存する現象と、一つの環状集落の内部に系統や型式の異なる家屋が共存する現象は、同一の社会的背景に起因していた可能性が高い。そこから垣間見える社会関係は、一集落内にとどまるどころか、関東地方と中部高地にまたがる遠方とのコネクションを暗示しているのである。

3-3. 異系統家屋からみた分節集団の性格

異系統家屋の分析から浮き彫りとなった事象の中でもとくに注目されるのは、環状集落を構成する分節単位が個々に集団的アイデンティティを保持する集団であること、そして集落外・遠隔地に広がる系統的關係をもつ場合があること、の二点である。なぜこのような現象が生じるのであろうか。

環状集落の分節構造を集落内部の社会関係だけで説明するのは困難であり、より広域的・包括的な社会の成り立ちの中でその意味を考察する必要がある。

冒頭にも述べたように、環状集落の分節構造は、集落の造営に関わった社会組織そのものの分節化を表わす現象であり、ことに血縁的系譜や出自の区別に基づく親族集団の分節化⁽⁵⁾を表している可能性が高い。中期の墓群において埋葬区分が厳格となり、長期にわたってその区分が踏襲されるあり方からは、集団への帰属が世代を超えて継承されていたことが読み取れる。出自や祖先の観念を組織原理とする部族社会の成立が環状集落形成の歴史的背景となっており、とりわけ分節構造が発達した中期は、分節的部族社会の段階に達していたと推定される。リネージュまたはシブのような典型的な単系出自集団が中期にすでに出現していた可能性が高いと筆者は見ている。半族組織を示唆する二大群や、その内部を入れ子状に区分する構造の存在などから考えても、最も蓋然性のあるモデルといえる [谷口 2005]。

勝坂式土器の分布圏内に、多数の集落を包含する広域的な部族が存在し、その内部がリネージュやシブのような単系出自集団によって分節化していた状態を想定すると、地域を超越した異系統家屋や異系統土器の動きを、出自集団の一般的特徴に照らして合理的に説明することが可能である。

その一つが、単系出自集団が通例的におこなう外婚制である。外婚制は同族内での婚姻を禁ずる婚姻規制であり、出自集団間の人的交流を促進し、姻戚関係を拡大させることで、集団の存続をはかる仕組みである。第二として、分節化した諸集団を秩序づける半族組織が挙げられる。多くの環状集落に二大群の分節化が見られる理由や、二大群の間の異質性などの諸現象を、これにより合理的に説明することが可能である。さらに第三として、トーテムズムや儀礼を担う機能が挙げられる。親族集団の諸タイプとそれらが担う機能を論じたマードック [1978] によれば、出自集団はトーテムズムや儀礼と結びつく傾向があり、儀礼の社会的単位としての機能をはたしている場合が多い。一例を挙げれば、カナダ・ブリティッシュコロンビアのハイダ族の場合、個人の名前、家・カヌーの儀礼的名称、トーテムの装飾、歌と儀礼、神話といった文化要素は、血縁親族集団である母系シブに属している。縄文時代において家屋の型式や系統がどのような集団に属し継承されていたのかはまったく未知であるが、中期に堅穴住居の型式が多様化した事実を見ると、分節化した出自集団に属していた可能性は十分あり得ることである。

中期環状集落の形成が本格化し始める勝坂式期に、遠隔地との直接的関係や交渉があり、土器型式だけでなく異系統家屋が伝えられることになった社会背景を、筆者は以上のように理解したい。

3-4. 中期における社会複雑化の要因

中期の環状集落において墓群の分節構造が顕著に発達したことは、系譜や出自の区分が厳格なも

のとなり、自他の区別意識が強まって社会内部の分節化が進行した状態を表す現象と考えられる。中期の東日本一帯で極限的に高まった遺跡分布密度を想起すれば、このような社会の複雑化にも必然的な理由が見出せる。人口密度が高揚するなかで、集団領域をはじめ地域全体の社会秩序を維持するには、複雑化する社会を統合し得る組織原理が必要である。それこそが出自集団を生む必然性であり、社会複雑化の主要因と考えられる。遺跡分布密度がとくに高い中部・関東地方で環状集落が発達した理由も、そのように考えることで合理的に説明できる。以上は「分節構造」に関する筆者の年来の持論である [谷口 2002・2005]。

それにしても、なぜ地域を大きく超えた社会関係が、分節構造の形成過程にあたる中期前葉から中葉に顕著に見られるのだろうか。この問題に示唆を与える一つの説明モデルが新進化主義の人類学者であるサーリンズによって示されている [サーリンズ 1982]。

彼の所論の第一のポイントは、単系出自と分節リネージ体系が組織される社会生態的条件を説明した部分である。リネージを組織する出自規則は本来、土地や資源の占有的利用とそれに対する集団的な財産所有の権利に結び付いている。社会の生存に不可欠なテリトリーとその権益を守るための組織ということもできる。そのため、限定的で地域化された資源を反復的・周期的に利用する生産様式をもつ社会において、単系性の強いリネージが組織される傾向が強いという。この条件は、遺跡分布密度が極限的に高まり、領域が細分化された中期の社会的状況によくあてはまる。

第二のポイントは、分節リネージ体系の政治的機能に関する説明である。分節リネージ体系は、多くの単位に分節化した部族を一時的に統合して一致団結した対外行動を取らせること、またその力が競争相手や先住者のいる土地への侵略的な領域拡大や部族の拡張を可能にするというのである。貝塚が急速に減退する諸磯c式期以降、前期末から中期初頭にかけて遺跡数が極端に減少した関東地方で、再び集落遺跡が増加し始めるのが、今問題にしている勝坂式期である。そうした時期に異系統家屋や異系統土器が顕著に見られるのは、侵略的な領域拡大とは断定できないまでも、中部地方や北陸地方を本来の領域とする部族による、関東地方への組織的・戦略的な進出を暗示するものではなからうか。

サーリンズの所論は、競争的で緊張関係のある社会的環境のなかに分節リネージ体系が発達する社会生態的条件があるという点に集約できよう。そしてこの見方は、縄文中期の関東・中部地方における拠点形成の動きや分節構造の発達という変化の説明にもよく当てはまる有効な説明モデルといえる。拠点的な環状集落が形成され始める初期段階に、分節的単位として異系統家屋が関東地方に入り込んでくる現象は、そのような社会状況を反映しているように思われるのである。

④……………結 論

4-1. 本論の摘要

中期前葉から中葉にかけて環状集落の造営が活発化し、分節構造が顕在化していく過程には、異系統家屋の受容という現象が特徴的に認められる。本論ではこの現象に着目し、勝坂式期の異系統家屋とその現象面の具体的検討を基に、該期における集落構造の特質とその社会背景を論じた。以

下の摘要を以て結論とする。

a. 事実と現象

- i) 中期中葉勝坂式期の関東地方南西部には、北陸系の異系統家屋と推定される二重柱穴列の掘立柱建物、中信系の異系統家屋と推定される「柱間溝」を有する大形竪穴住居や多柱穴の円形竪穴住居が移入され、一部の環状集落に受容されている。
- ii) 異系統家屋の伝わり方は、隣接する地域や集落を順に経由した玉突き式の単純な伝播ではなく、地域や距離を大きく隔てた、遠隔地間の直接的関係を示している。
- iii) 異系統家屋の受容は、同じ地域にある集落でも一様ではなく、また環状集落を構成する分節単位ごとに異なる場合がある。環状集落を構成する二大群の片方だけに、異系統家屋が移入される場合がある。

b. 説明と解釈

- iv) 環状集落の分節構造を構成する単位集団は、個々にアイデンティティを保持し、かつ集落外・遠隔地につながる社会関係を有していた可能性がある。勝坂式期における拠点的な環状集落の造営には、そのような複数の、系統の異なる単位集団が関与していた可能性がある。
- v) 異系統家屋に現れた諸現象は、中期前葉・中葉の土器群に顕著に認められる、キメラ的な折衷土器や異系統土器の共存現象とも密接に関連し、共通の社会的背景を表していると考えられる。
- vi) 勝坂式土器の分布圏内をテリトリーとする部族があり、その内部がリネージ・シブのような単系出自集団に分節化していた状況が想定できる。地域を超越した異系統家屋や異系統土器の動きは、単系出自集団がおこなう外婚制によって助長された可能性が強く、また環状集落が異質な二大群によって形作られる事例は、部族内の諸集団を二派に区分する半族組織の存在を示唆している。

4-2. 展望と課題

環状集落の姿は長期間にわたる遺構の累積結果に過ぎず、見かけの姿や規模から縄文社会を窺い知ることはできないという懐疑論がある。厳密な同時性で捉えた一時点の集落の姿から見れば、「環状集落」など存在しない、という極端な意見も示されている。筆者は、そのような意見に対しては環状集落の歴史的意義の過小評価につながるものとして一貫して反対し、環状集落の規則的な空間構成の分析から造営に関わった人々の意識や社会関係を読み取ろうとする立場で研究を進めてきた。環状集落をめぐるこのような見解の相違は、縄文時代の社会構造やその歴史の見方を分岐させる大きな論争である。⁽⁷⁾環状集落の事例分析をさまざまな視点からさらに深めていく必要があり、その中では家屋の型式・系統に関する検討が一つの有効なアプローチとなる。

ただし、家屋の型式分類・系統分類には方法論上の課題がないわけではない。「異系統家屋」論の前提には、家屋にも型式があり、遠隔地であっても同一型式の家屋が採用された集落間にはそれを伝達する関係があった、という説明の論理がある。しかし、家屋の型式を残された遺構から分類・同定するのは簡単ではない。ある種の際立った特徴や属性で類似していても、その他の属性で比較をすれば家屋の構造は実際には多様であり、完全に同一というわけではない。上屋を含めた上部構

造がまったく不明な点も克服しがたい限界である。同定の確度を高めるためには、同一系統であることを裏付ける、より確かな根拠が必要となる。

その一つとして本論では、住居廃絶時ないし更新時に石囲炉の石材の一部を取り去る行為に着目し、その共通性を、中信系の異系統家屋の認定の根拠に挙げた。偶然の類似とは考えられないこうした文化的行為を注意深く観察し比較することで、異系統家屋の同定をより正確におこなうことができる考えたわけである。異系統土器の共存現象や型式属性の遺跡間共有など、同時期の縄文土器から得られる情報を用いてモデルを検証することも、異系統家屋の研究法を補強する有効な手立ての一つになり得よう。

議論はスタートしたばかりであり、事例研究と方法論の両面に課題は残るが、異系統家屋が環状集落の研究を深化させる有効な分析視点になり得ることを展望して、ひとまず小論を終えることとする。

謝辞 二重柱穴列をもつ掘立柱建物跡および柱間溝をもつ竪穴住居跡の事例集成、ならびに表1・表2の作成では、川島義一氏にご協力いただいた。図版作成では中島将太氏にご協力いただいた。また、神奈川県ナデッ原遺跡の未報告資料について戸田哲也氏よりご教示を得た。各位のご協力に心より謝意を表する。

註

(1)——石井寛 [2001b] が列挙した17遺跡のうち、神隠丸山遺跡(7棟以上)、ナデッ原遺跡(多数)は現時点で報告書未刊のため詳細を確認できない。記載された事例数を既刊の報告書で確認できない遺跡もあり、石井自身が調査または実見した未公表の事例が含まれているものと思われるが、本論表1には報告書で確認できる資料のみを集成した。

(2)——ナデッ原遺跡の報告書は未刊、戸田哲也 [2009] の記述に基づく。掘立柱建物の規模は集落全体図からの略測。長大な二重柱穴列タイプのほかに、規模が比較的小さく求心的な放射状配置をとる10号がある。

(3)——大林太良 [1971] は、石囲炉の炉石の抜き取り行為を、住居更新にあたっての家系の継承に関係するものと論じている。

(4)——小葉一夫 [2003] が集成した44遺跡132例のうち、柱間溝の認定に疑問が残るものは筆者の判断で除外し、2003年以降に新たに報告された事例を加えて集計した。なお、2つの柱穴の間だけに溝が切られた例が

少なからず存在するが、柱間溝との関連が不明確なため、ここでの集成には含めないこととした。

(5)——「出自」とは、祖先からの血縁の系譜によって個人を特定の親族集団に帰属させる文化規則である。それは生物学的な意味での血縁関係と同義ではなく、文化的・社会的な系譜関係の認知であり、父系・母系のように系譜の辿り方を定め、個人の帰属を明確に決めるものである。

(6)——「リネージ」「シブ」の用語と定義はマードック [1978] に従う。「リネージ」は数代から10代位の実際の系譜が記憶され認知された父系または母系の単系出自集団であり、厳格な系譜認知により組織された血縁親族集団である。一方、単系出自集団のもう一つの代表的なタイプである「シブ」は、成員がもつ出自観念は実際の血縁系譜とは限らず、神話や伝説上の始祖からの出自を自称自認している場合もある。

(7)——環状集落をめぐる見解の相違と争点については旧稿に整理した [谷口1998・99]。

参考文献

- 石井 寛 1989「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究集録』6, 1-58頁, 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
石井 寛 2001a「付編1 小丸・小高見遺跡の勝坂式期集落址」『前高山遺跡・前高山北遺跡』151-164頁, 横浜市ふるさと歴史財団

-
- 石井 寛 2001b 「付編2 まとめと考察」『前高山遺跡・前高山北遺跡』165-192頁, 横浜市ふるさと歴史財団
石井 寛 2007 「後期集落における二つの住居系列—柄鏡形住居址系列と掘立柱建物跡系列—」『縄文時代』18, 51-82頁
今福利恵 1993 「勝坂式土器成立期の集団関係」『山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』9, 18-45頁
今福利恵 2008 「土器型式属性の共有関係」『縄文時代の考古学7』192-204頁, 同成社
鶴飼幸雄 1990 「棚畑遺跡の縄文時代集落の概観」『棚畑』663-698頁, 茅野市教育委員会
大林太良 1971 「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』2 (2), 3-81頁
小栗一夫 2003 「『柱間溝』覚書き」『法政考古』30, 57-74頁
小林謙一 1984 「中部・関東地方における勝坂・阿玉台式土器成立期の様相」『神奈川考古』19号, 35-74頁
小林謙一 1990 「縄文時代中期勝坂式・阿玉台式土器成立期における竪穴住居の分析—地域文化成立過程の考古学的研究—」『信濃』42 (10), 19-56頁
小林謙一 2011 「土器の折衷」『異系統土器の出会い』111-135頁, 同成社
佐々木藤雄 1984 「方形柱穴列と縄文集落」『異貌』11, 113-139頁
佐藤達夫 1974 「土器型式の実態—五領ヶ台式と勝坂式の間—」『日本考古学の現状と課題』81-102頁, 吉川弘文館
サーリンズ, M.D. (向井元子訳) 1982 「分節リネージュ—侵略的領域拡張の組織—」『社会人類学リーディングス I』170-206頁, アカデミア出版会
谷口康浩 1988 「勝坂式土器様式 第三群土器第8系統」『縄文土器大観2 中期 I』116-121頁, 小学館
谷口康浩 1998 「縄文時代集落論の争点」『國學院大學考古学資料館紀要』14, 43-88頁
谷口康浩 1999 「縄文時代文化研究の100年—集落・領域研究—」『縄文時代文化研究の100年 第3分冊』38-58頁, 縄文時代文化研究会
谷口康浩 2002 「環状集落と部族社会—前・中期の列島中部—」『縄文社会論 (上)』19-65頁, 同成社
谷口康浩 2005 「環状集落と縄文社会構造」学生社
谷口康浩 2014 「集落と領域」『講座日本の考古学4 縄文時代 (下)』215-250頁, 青木書店
戸田哲也 1989 「藤沢市ナデッ原遺跡の調査」第13回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨, 7-9頁
戸田哲也 2009 「環状集落と広場 (ナデッ原遺跡)」『大地に刻まれた藤沢の歴史II 縄文時代』56-58頁, 藤沢市教育委員会
中西 充 1982 「縄文時代中期の出土土器について」『神谷原II』603-628頁, 八王子資料刊行会
マードック, G.P. (内藤莞爾監訳) 1978 『社会構造』新泉社
山本典幸 2002 「異系列文様・文様帯の同一個体内共存とその社会的機能に関する試論—縄文時代中期初頭期—」『國學院大學考古学資料館紀要』18, 105-116頁
山本典幸 2008 「縄文式土器と文化圏—文化史復元研究は本当に乗り越えられたのか—」『季刊東北学』15, 128-153頁
- 発掘調査報告書 (本文引用分)
- 石原田北遺跡発掘調査団編 2001 『石原田北遺跡 J マート地点』石原田北遺跡発掘調査団
忠生遺跡調査団編 2011 『忠生遺跡 B 地区 (II)』忠生遺跡調査会
棚畑遺跡発掘調査団編 1990 『棚畑』茅野市教育委員会
茅野市教育委員会編 2003 『梨ノ木遺跡』茅野市教育委員会
東京都埋蔵文化財センター編 1993 「No.471 遺跡」『多摩ニュータウン遺跡—平成3年度— (第3分冊)』東京都埋蔵文化財センター
長野県中央道遺跡調査団編 1976 「大石遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その1—昭和50年度』長野県教育委員会
長野県埋蔵文化財センター編 2005 『聖石遺跡・長峯遺跡 (別田沢遺跡)』長野県埋蔵文化財センター
梨久保遺跡調査団編 1986 『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
新潟県埋蔵文化財調査事業団編 1999 『和泉A遺跡』新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
八王子市栲田遺跡調査会編 1976 『栲田遺跡群 1975年度調査概報』八王子市栲田遺跡調査会
八王子市栲田遺跡調査会編 1982 『神谷原II』八王子資料刊行会
八王子市南部地区遺跡調査会編 1988 『南八王子地区遺跡調査報告4 滑坂遺跡』八王子市南部地区遺跡調査会
八王子市南部地区遺跡調査会編 1996 『南八王子地区遺跡調査報告10 郷田原遺跡』八王子市南部地区遺跡調査会
八王子市南部地区遺跡調査会編 1998 『南八王子地区遺跡調査報告12 小比企向原遺跡』八王子市南部地区遺跡調査会
俎原遺跡発掘調査団編 1986 『俎原遺跡』塩尻市教育委員会
山梨県埋蔵文化財センター編 1997 『酒呑場遺跡 (第1・2次) 遺構編』山梨県教育委員会
-

-
- 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 2000『大熊仲町遺跡』横浜市教育委員会
 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 2001『前高山遺跡・前高山北遺跡』横浜市ふるさと歴史財団
 横浜市埋蔵文化財センター編 1990『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告X 全遺跡調査概要』横浜市埋蔵
 文化財センター
 発掘調査報告書(表1・表2集成資料, 文献番号に対応)
 報1:『和泉A遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書93, 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団, 1999
 報2:『一ノ瀬・芝ノ木遺跡』茅野市教育委員会, 2001
 報3:『神谷原Ⅱ』八王子資料刊行会, 1982
 報4:『忠生遺跡 B地区(Ⅱ)』忠生遺跡調査会, 2011
 報5:『日影山遺跡・東山道武蔵路』西国分寺地区遺跡調査会, 1999
 報6:『多摩ニュータウン遺跡 平成3年度(第3分冊)No.471遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告15, 東京
 都埋蔵文化センター, 1993
 報7:『川崎市麻生区黒川地区遺跡群報告書Ⅷ 宮添遺跡・No.10遺跡(縄文編)』住宅都市整備公団, 1997
 報8:『横浜市保土ヶ谷区南原遺跡発掘調査報告書』県営南原団地内遺跡発掘調査団, 2003
 報9:『大地に刻まれた藤沢の歴史Ⅱ 縄文時代』藤沢市教育委員会, 2009
 報10:『高山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告35, 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター, 2004
 報11:『前高山遺跡・前高山北遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告29, 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵
 文化財センター, 2001
 報12:『三の丸遺跡調査概報』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告VI, 横浜市埋蔵文化財調査委員会, 1985
 報13:『花見山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XVI, 横浜市教育委員会, 1995
 報14:『全遺跡調査概要』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告X, 横浜市埋蔵文化財センター, 1990
 報15:『北川貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告39, 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター, 2007
 報16:『大熊仲町遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告26, 横浜市教育委員会, 2000
 報17:『観福寺北遺跡・新羽貝塚発掘調査報告』横浜市埋蔵文化財調査委員会, 1989
 報18:『大口台遺跡発掘調査報告書』横浜市埋蔵文化財センター, 1992
 報19:『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告136, 富山市教育委員会, 2004
 報20:『熊久保遺跡第10次発掘調査報告書』朝日村教育委員会, 2003
 報21:『史跡平出遺跡一環境整備に伴う発掘調査報告書 その1』塩尻市教育委員会, 2015
 報22:『祖原遺跡』塩尻市教育委員会, 1986
 報23:『小池遺跡Ⅱ・一ツ家遺跡』松本市文化財調査報告126, 松本市教育委員会, 1997
 報24:『峯畑遺跡』塩尻市教育委員会, 1994
 報25:『辻沢南遺跡』駒ヶ根市教育委員会, 1988
 報26:『丸山南遺跡』駒ヶ根市教育委員会, 1977
 報27:『中野市千田遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書98, 長野県埋蔵文化財センター, 2013
 報28:『川原田遺跡』御代田町教育委員会, 1997
 報29:『茅野市史 上巻(原始・古代)』茅野市, 1986
 報30:『梨ノ木遺跡』茅野市教育委員会, 2003
 報31:『棚畑遺跡』茅野市教育委員会, 1990
 報32:『林の峰遺跡』茅野市教育委員会, 2000
 報33:『聖石遺跡・長峯遺跡・別田沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書69, 長野県埋蔵文化財センター, 2005
 報34:『尖石』茅野町教育委員会, 1957
 報35:『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その1・富士見町その2』長野県教育委員会, 1976
 報36:『井戸尻遺跡』中央公論美術出版, 1965
 報37:『古林第4遺跡Ⅱ』大泉村教育委員会, 2002
 報38:『八ヶ岳南麓大泉村の縄文時代 遠い記憶1』大泉村教育委員会, 2001
 報39:『甲ツ原遺跡4』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書145, 山梨県教育委員会, 1998
 報40:『酒呑場遺跡』山梨県埋蔵文化財センター, 1997
 報41:『石原田北遺跡Jマート地点発掘調査報告書』石原田北遺跡発掘調査団, 2001
 報42:『古堰遺跡・大林上遺跡・宮の前遺跡・海道前C遺跡・大林遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
-

-
165. 山梨県教育委員会, 2000
報43:『石之坪遺跡(東地区)』韮崎市教育委員会, 2000
報44:『滑坂遺跡』八王子市南部地区遺跡調査会, 1988
報45:『多摩ニュータウン遺跡 No.107 遺跡 旧石器・縄文時代編』東京都埋蔵文化財センター調査報告64, 東京都埋蔵文化財センター, 1999
報46:『多摩ニュータウン遺跡 No.72・795・796 遺跡(15)』東京都埋蔵文化財センター調査報告50, 東京都埋蔵文化財センター, 2004
報47:『東京都多摩市和田・百草遺跡群・落川南遺跡』多摩市遺跡調査会, 1985
報48:『多摩ニュータウン遺跡 No.520 遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告92, 東京都埋蔵文化財センター, 1999
報49:『多摩ニュータウン遺跡 No.3 遺跡』平成元年度第3分冊, 東京都埋蔵文化財センター, 1991
報50:『恋ヶ窪東遺跡発掘調査概報Ⅲ』国分寺市遺跡調査会, 2003
報51:『井の頭池遺跡群A』三鷹市教育委員会, 2001
報52:『西台遺跡Ⅱ』世田谷区教育委員会, 2010
報53:『明治薬科大遺跡』世田谷区教育委員会, 2000
報54:『堂ヶ谷戸遺跡Ⅵ(改訂版)』武蔵文化財研究所, 2008
報55:『等々力原遺跡Ⅰ・等々力根遺跡Ⅱ・御岳山古墳Ⅰ』世田谷区教育委員会, 2000
報56:『鶴川遺跡群』町田市教育委員会, 1972
報57:『忠生遺跡 A地区(Ⅰ)』忠生遺跡調査会, 2007
報58:『忠生遺跡 A地区(Ⅳ)』忠生遺跡調査会, 2011
報59:『木曾森野南遺跡発掘調査報告書』木曾森野地区南遺跡発掘調査団, 1997
報60:『下原遺跡』相模原市当麻・下溝遺跡群調査会, 1992
報61:『下中丸遺跡』相模原市当麻・下溝遺跡群調査会, 1992
報62:『上中丸遺跡』相模原市当麻・下溝遺跡群調査会, 1994
報63:『神奈川県厚木市恩名沖原遺跡発掘調査報告書』恩名沖原遺跡発掘調査団, 2000
報64:『神奈川県海老名市望地遺跡 第8次調査 発掘調査報告書』海老名市望地土地区画整理組合, 2007
報65:『神奈川県海老名市杉久保遺跡1 勝坂期』日本窯業史研究所, 1992
報66:『南原遺跡』かながわ考古学財団調査報告129, かながわ考古学財団, 2002
報67:『南原遺跡発掘調査報告』横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター, 2002
報68:『岡田遺跡発掘調査報告書』県営岡田団地内遺跡発掘調査団, 1993
報69:『原口遺跡Ⅲ 縄文時代』かながわ考古学財団調査報告134, かながわ考古学財団, 2002
報70:『小丸遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告25, 横浜市教育委員会, 1999
報71:『大高見遺跡・小高見遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告38, 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター, 2005
報72:『宿根西遺跡発掘調査報告書』宿根西遺跡発掘調査団, 1999
報73:『横浜市港南区下永谷6丁目遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所, 2007

(國學院大學文学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2017年3月17日受付, 2017年7月31日審査終了)

The Segmentation Structure of Circular Villages and Extraneous Houses

TANIGUCHI Yasuhiro

In light of the phenomenon that a settlement included several extraneous houses, this paper aims to describe the structure of circular villages of the Middle Jomon period and the social context behind it. To this end, this paper examines circular village sites built in the middle phase of the Middle Jomon period in Kanto and Chubu regions to assess how the extraneous houses affected the formation of the segmentation structure of the villages.

In the middle phase of the Middle Jomon period, large posthole-type buildings originated from the Hokuriku region and pit dwellings typically seen in the Chubu Highlands region were introduced and accepted in some circular villages in the southwest of the Kanto region. This study analyses the distribution of these extraneous houses and consequently indicates that they seem to have been introduced directly from their respective places of origin, rather than spreading in orderly sequence from one village or district to the next. Moreover, this paper reveals that the acceptance and coexistence of extraneous houses were closely related to the contemporary fusion and coexistence of different styles of pottery including extraneous one.

In conclusion, this paper suggests the model of society that can reasonably describe the above-mentioned phenomena. It seems that in the middle phase of the Middle Jomon period (the Katsusaka-style Pottery period), the construction of circular villages involved multiple different lineages. These segmental groups maintained their respective identities and relations with other relatives outside of their settlements in distant places. A large tribal group whose territory coincided with the geographical distribution of Katsusaka-style pottery was segmented into various unilineal descent groups such as lineages and sibs. The geographically discontinuous distribution of building and pottery styles is likely to have been promoted by exogamy, which was generally seen in unilineal descent groups.

Key words: circular village site, segmentation structure, extraneous house, extraneous pottery, segmental tribe, Middle Jomon period, middle phase of the Middle Jomon, Katsusaka style pottery, lineage, sib, unilineal descent group, exogamy